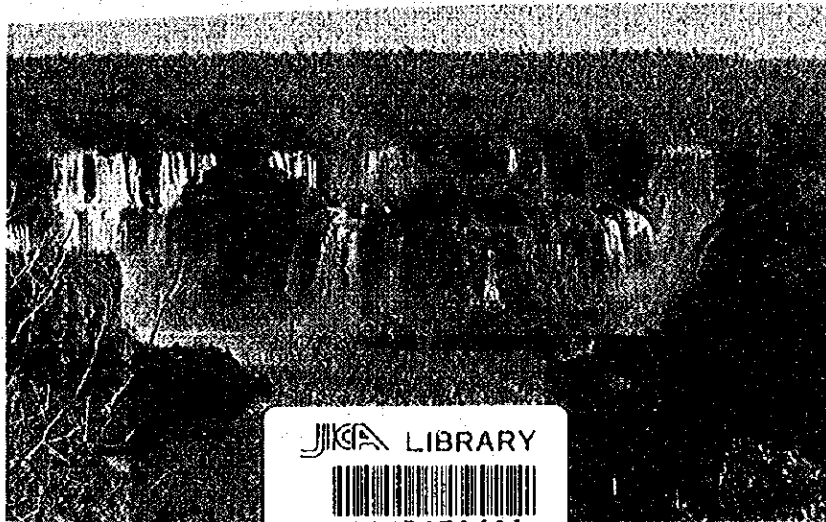


ゆうかり 第5回

ゆうかり

第5回移住者子弟技術研修生
研 修 レ ポ ー ト



JICA LIBRARY



J 1135678 [9]

1977年6月

国際協力事業団

700
247
EI
RARY

巻 頭 言

昭和46年度から開始した移住者子弟技術研修制度は、今年で7年目を迎え、中南米から受入れた研修生は、現在研修中の6,7回生(各18名)を含め、総数108名になりました。

国際化の時代といわれる今日、世界の中における日本の立場は、経済的、技術的協力並びに文化的交流を、より積極的におし進めるべき役割を背負っているといえますが海外に移住した方々の子弟達が、母国日本においてより高い知識、技術を習得し、改めて日本を理解して立ち帰り、相手国社会の開発、推進に貢献する本制度は、海外移住の成果であり、最も効果ある国際協力といえましょう。

中南米においても、産業の発展は、最近、きわめて目ざましくブラジルにいたっては21世紀を担う国とも言われる程急成長を続けております。このため農業分野においても、生産技術の改善、大型機械の導入等が積極的に行なわれており、研修生の報告を見ても、技術の習得はもちろん、経営の合理化、省力化そして日本の先進農家のアイデア等を自己の経営に取り入れようとする、その関心と吸収度はまことに目を見張るものがあります。

今や中南米各国の移住地ではこの研修生達のような若者の占める役割は大きく、この技術研修は本人のみならず、移住地及びそれを取り巻く地域社会の発展に資するものがきわめて大きく、本制度に対する期待と要望も又、年毎に強くなってきております。

このように研修生の帰国後の活躍が大いに期待されるのですが、本誌を、帰国した研修生の報告として、お互いの技術交換の場とし、励みとしていただきたいこと、併せて本研修制度をより一層推進するための材料とし、又、各研修先へのお礼の一端にかえさせていただくため発刊した次第です。

各研修先の諸先生方はじめ、又、中南米各地の移住者父兄の方々に対し、この今日的意義のある本制度について、今後ともより一層の深いご理解とご指導をお願いする一方、ここまで育てていただきました各研修先の試験場、学校、会社、農家の諸先生方に対し、格別のご厚情を賜りましたことを厚くお礼申しあげる次第です。

1977年6月

国際協力事業団

移住第二業務部長



1135678[9]

目 次

巻 頭 言

「学びたい事」・技術研修を終えて

ブラジル国・ブラジリア	大 城 竹 幸	1
日 光	有 田 和 人	3
ピニヤール	広 瀬 昭 憲	6
ムンドノーボ	田 中 愛	8
グェタバラ	小 林 武 久	10
日 光	中 村 清 繁	13
第2トメアス	平 水 憲 一	16
第2トメアス	遠 藤 毅	19
トレゼセテンプロ	須 藤 文 治	20
サルパドール	吉 井 等	22
ラーモス	鈴 木 節 朗	25
パラグアイ国・イグアス	関 藤 則 吉	27
アルト・バラナ	工 藤 元 敬	29
アマンバイ	下 野 悦 郎	31
アルゼンチン国・ガルアペー	水 野 孝 司	34
ウルキッサ	西 田 孝 司	37
ボリビア国・サンファン	牧 尾 邦 夫	39
オキナワ	宮 城 正 英	41
オキナワ	池 原 正 英	42

日本の印象

宮 城 邦 夫	45
有 田 和 人	46
平 水 繁	47
田 中 愛	48
遠 藤 憲 一	49

合同研修

水 野 悦 郎	51
工 藤 則 吉	52
広 瀬 昭 憲	54
関 節 朗	55

第16回全国農村青少年技術交換大会に参加して

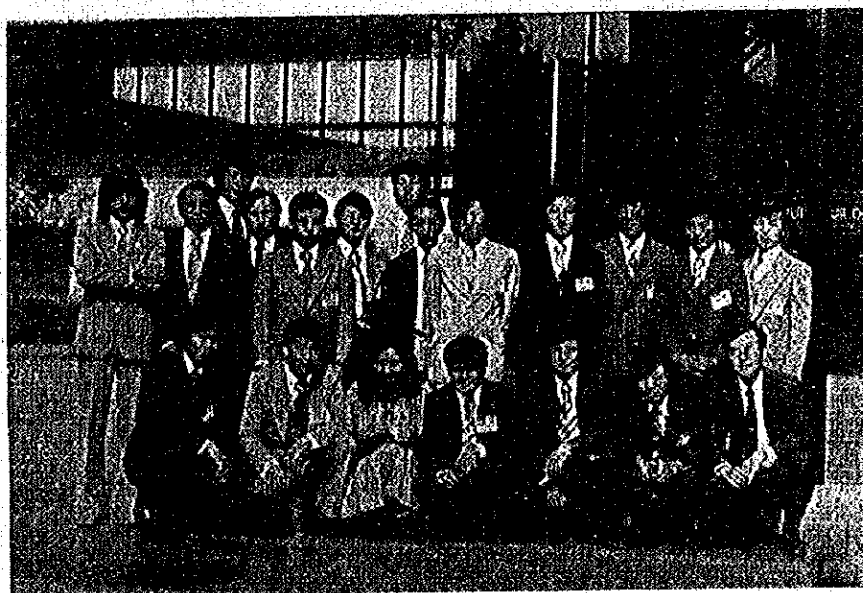
牧 尾 孝 司	57
吉 井 文 治	58
小 林 武 久	59
西 田 孝 人	61
有 田 和 人	62

子弟研修一覧表

第1回生(昭和46年度)子弟研修生一覧表	66
第2回生(昭和47年度)	68
第3回生(昭和48年度)	70
第4回生(昭和49年度)	72
第5回生(昭和50年度)	74

編集後記	76
------	----

第5回移住者子弟技術研修生



(国際協力事業団 本部：新宿三井ビル前にて)

牧	平	小	西	有	下	広	遠	吉	須	大	関	中
尾	水	林	田	田	元	瀬	藤	井	藤	城	節	村
孝	繁	武	孝	和	敬	昭	憲	丈	毅	竹	朗	清
司		久		人		憲	一	治		幸		
				宮	鈴	田	池	工	水	(高		
				城	木	中	原	藤	野	橋		
				邦	等	愛	正	則	悦	職		
				夫			英	吉	郎	員)		

学 び た い 事
技 術 研 修 を 終 え て

「応募の動機と研修目的」



はるか地球の裏側ブラジルで祖国日本の奇跡ともいわれる繁栄を開き、その原因が教育と技術にあることを知り、小学校一年生で離日した私は、いつの日かきっと日本へ帰って技術を身につけてこのブラジルで生かしたいと以前からかたく心に誓っていました所、今度インクラ植民地日本人会を通じ、国際協力事業団より移住者子弟技術研修生として日本で勉強してこないかというお話があり、願ってもないチャンスですし、又幸いにも父母の理解とすすめもありましたので、早速応募する次第です。

今私が農業に従事している所は、ブラジルの首都ブラジリア近郊50キロの地点ですので、日本の集約的な近郊農業は非常に参考になるのではないかと考えています。現在の営農は主に蔬菜を中心としたものですが、大生産地であるサンパウロ等の影響を受けて野菜の値が安定せず、皆それぞれ野菜中心の営農からの脱皮を計っていますが、自分としては今回の日本研修を機会にブラジリアの官庁、大使館、銀行、事務所、アパルタメント等対象とした観葉植物鉢物に将来性があると思っていますので、その方向で新しい営農形態をもっていきたいと思っています。その点ブラジリアは熱帯にありますので、付近の木を採って植えるような感じもいいわけですが、私は温帯にあって熱帯植物を栽培する日本農業のたゆまぬ研ぎ改良の精神を含めて栽培技術を勉強したいと思います。

更に観葉植物に関係しますが、最近の日本及び東洋ブームはブラジルにも波及しています。中でも日本独特の盆栽にも非常に興味が集まっておりますので、ブラジルでは未開拓な日本伝統の盆栽を新しいタイプの鉢物としてこちらで商品化出来たらと思い、是非日本で学んで来たいものだと思います。又、以前サンパウロ近郊で従事していた花卉方面でも時間的余裕があれば日本の優秀な技術

ブラジル国・ブラジリア
大城竹幸

を身につけたいものだと考えております。

田中首相が来伯されるようになったこれからの日伯関係において、ブラジルにおける日本語の重要性はますます増大しています。日本の若い人達との友情も得られると思いますし、より完全な日本語を習得出来ましたら、私の研修はより一層有意義になるものと考えています。

「日本での技術研修を終って」

ブラジルから日本に研修にきてもう1年半たちます。何んとうに月日のたつのは早いものです。ちかいうちにブラジルにかえらなければなりません、早くかえりたいきもちが半分と、まだ日本に残りたいきもちが半分と、いうところが今の正直な私の心境です。

私が1年半、花栽培の研修をしたところは、日本の五大種苗会社の一つです。第一園芸株式会社、静岡県駿東郡小山町にあり、富士山がすぐそばに見える空気のきれいな静かなところ です。

総面積4万坪、温室1300坪、研究室、低温貯蔵庫、土壌消毒配合舎、その他最新の設備をそなえた農場です。標高430メートル、降雨量は年間約2000ミリ、温度は最低マイナス15度になることがあり、冬の平均はマイナス8度ぐらいで、私にとっては寒さがたいへんきびしかったのですが、夏は30度以上になる日が少なく、すごしやすいところです。この農場は、研究部門と生産部門とに分かれておりますので、最初の1年間は生産部門で、あとの半年は研究部門で研修をしました。

研修は、露地全般にわたって実際の農場作業を社員の指導で行ない、さらに週6～8時間一流大学の先生方による花栽培全般についての講義がありました。研修内容は、数が多く、どれも将来何かの形で役にたつと思っておりますが、その中で特に参考になったものをとりあげてみます。

非常に役にたったことは、各種類の繁殖技術を勉強できたことです。農場にはヨーロッパをはじめ各国から輸入した樹木や草花が約300種以上栽培しており、その中から日本に向く種類をえらんで繁殖し販売しておりますが、それらの挿し木や接木による繁殖技術をいろいろな種類ごとに、実際に自分でやり発根までの管理、発根したあとの管理など最後まで学ぶことができたのはたいへん役にたち、ブラジルでもすぐ応用できることだと思います。

また繁殖用のミスト装置などの機械類もブラジルへ取り入れたいものが多くありました。もうひとつの大きな成果は、メリクロンの技術を研修したことです。ご存知のかたもあると思いますが、メリクロンの大きな特長は、(1)無病、特にバイラスのない植物を作れる、(2)短期間に多数の増殖ができる、(3)育種に応用できるなどのすばらしい技術で世界各国で研修されています。第一園芸でも特に力を入れて研究しており、カーネーション、ガーベラをはじめ数十種類の成果があがっております。これは植物の成長点をけんびきょう下で、ミクロの大きさでとりだし、特殊な培養液の中で無数にふやすこともできるというすばらしい技術です。私は、この技術をブラジルで完成させ、病気で問題になっているブラジルの作物も、たとえばコショウなど応用して無病の苗を作ることができたならすばらしいことだと思います。

私の大きな夢の一つです。また農場の実習以外に各地の農家を訪問できたのもいろいろと参考になりました。

無理をせずに、あくまでも自分の力に応じて、経費と収入とのバランスをとりながら、経営するのが重要だということが大きな一つの教訓です。

日本で学んだことが、そっくりそのままブラジルにあてはめることはむずかしいことと思いますが、身につけた技術をどのように、ブラジルに応用生かすことができるかがこれからの私自身の大きな問題だと思います。それから日常生活では、寮生活は生れてはじめてでしたが、社員や他の研修生の人たちと同じ寮で生活し、よいともだちをたくさん作れたことは、日本にきた大きな収穫の一つです。

これらの人たちを、また日本を、私はブラジル

にかえってからも、けっして忘れることはないでしょう。最後に終始、親身になってお世話してくださった国際協力事業団のみなさん、研修先のみなさんに心からお礼申し上げます。

「今後の農業経営のあり方」



去る7月26日の朝、初めて日本人会長様から国際協力事業団の子弟技術研修生のお話を聞きました。そして会長は「日本へ行って1年半みっちり勉強してこないか」と僕を研修生に推薦して下さいました。その場ではすぐに返事は出来ませんでした。お話を聞いた時、僕の胸は大きな感動を受けたのです。それは僕自身研修生として日本の進んだ農業を実際に確めて、身で感じ学んできたい希望があったからです。

なぜなら、我ら農業者が現在の様な農業不振の状態の中で生き残って行くには、人並の事をしていたのでは、自滅するのが目にみえているからです。安定性作物の筆頭として数えられるカフェーにしたところで、最近では安定どころか少しも他の例外ではありません。よほどの生産量を上げないかぎり、生産費も出ない有様です。

今年に入って肥料、農業を始め人件費、その他あらゆる一般生産資材の急騰ぶりには、ただおどろくばかりです。カフェー、ブドウ等も今までは何とか経営が成り立ってきましたが、今後の農業はもっと技術を生かした進んだ農業で、より優れた良質の品を少面積からより多く収穫を上げる様に努力する以外には道は無い様に思います。

それならば僕達農業者は常に優れた技術や研究しなければならぬ事を深く感じるので有ります。こんな事を深く考えてみると、研修生という2度とない恵まれたチャンスは十分に生かしてみたいのです。しかし一方では、家庭の問題も考えてみました。僕の家では現在でさえ何かと人手不足で忙しいのに……これ以上労力を失っても家は大丈夫だろうか？次々と色んな考えが重なり、どうしても自分の考えがまとまらないので、もう一度日本人会長様に会い、自分の考えを打ち明け話したところ、会長は「君が本当に将来を考え、又植民地の後継者として村の発展を思うなら行きな

ブラジル国・パラナ州・日光移住地

有 田 和 人

さい。青年会の代表となって日本へ行って勉強してくるべきだ。君が強い気持で『研修生として勉強してきます』と言うなら、お父さんも『行くな』とは言わないはずだよ。』と言うようなお話しをして下さいまして、ようやく決心して父に研修生の話しを切り出したところ、父は意外に「そうか、日本で世間の荒波にもまれて来るのもいいだろう」とあっさり許してくれました。なお、父はこうつけ加え「行くからにはよほどの腹を決めてかからないと駄目だぞ」と忠告を与えてくれ、又「農業技術を身につけて帰る事も大切なことで、これもしっかりと勉強してこなくては行けない。しかしそれ以上にもっともっと学んで帰らなければならぬものがあるはずだ、それは2千年という間に培われた日本の農業精神をよく学んでくる事だ」と声を大きく強調してくれました。日本の農業精神？何となく解る様な気もするが、その深い本当の意味は解っていないのです。この日本の農業精神という正体の解らないなにか物か、僕の研修生として日本における最大の課題となる気がします。

もちろん、日本へ行けば数々の大きなカベにぶつかる事は今から覚悟はしております。

又、色々と解らない点も沢山でてきて不安もありましょう。でも、それは常に明るい希望を持ち、一つ一つ真剣な気持で取り組んで行くのなら必ずそこには道が開けて行くものだと思っています。

僕のような未熟者に、身に余るチャンスを与えて下さいました事業団を始め当移住地の皆様、会長様、父母家族の者、総ての人に心から感謝すると共に、研修生としての期間、1年半余り頑張っ

「日本での技術研修を終って」

昨年4月20日、16年ぶりに故郷の土を踏んでから1年半という研修期間が、またたく間に過ぎてしまった。

私の日本での研修目的は、単に農業技術を学ぶ事だけではなく、いかなる難儀に対しても自力できりぬけ、突破できるだけの強い農業精神を養うことが最っとも大事なことです。

また、農業に関係なくあらゆる分野にわたり、先進国日本の実情を確かめて、時間と経済的に許される限りは、あちこちを見て回り見聞を広め、社会的知識を向上させる事にあります。

私の前期研修は、果樹の先進地、山梨県果樹試験場で1年間、ブドウを主体とした果樹の基礎的専門の先生方から詳しく御指導いただいた。

果樹試験場における私の研修内容と生活面について証してみたいと思います。

ブドウ栽培の技術的な面では、密植栽培はさけ、樹冠拡大を図ることがいかに大切であること。適切な収量結果を行ない、味のよい良質なブドウを生産すること。さらに房作り摘粒というような高度な技術をいかし、日持ちのよいブドウを作る。ブドウの房に特殊なカサ、袋をかぶし、日焼け、雨風、小鳥や虫害、薬害などを防ぐことが可能であること。こうした一連の技術を修得することができた。土壌管理につきましても、有機質肥料を主体にした、その時期に応じた施肥法など、ブラジルに帰国後、直ちに活用できる実践的な研修を講義、実習をとおして学ぶことができました。

日常生活におきましては、日本の習慣になれるまで時間を費し、はじめての下宿生活は窮屈とそあれ楽しいと感じた日はなく、他人の家の飯の苦さを様々と味わったことも今おもえば、大変良い経験におもえます。

私のように16年間も常夏の国ブラジルで生活してきたものにとりましては、四方、八方山に囲まれた山梨の冬は冷たく寒かった。下宿から試験場まで(3km)毎日、自転車に乗って通い、雪や雨が降れば歩いて通ったことも、精神的には非常にプラスとなっています。

視察見学旅行は積極的に行動して、1箇所でも多く見て回ることを心掛けてきました。

研修旅行としては、7月に横浜の日本電気工場見学、9月長野県の園芸試験場、農試分場に行き、ブドウ、リンゴの研修、10月は茨城県の農林省、熱帯植物研究センターと園芸試験場を見学し、熱帯植物、クリ、ナシ、柿などの実態を研修、1月

は静岡県下田の熱帯有用植物園では花卉類を見学しました。

その他の旅行では、仙台、松島、日本平、駒ヶ岳、岐阜、京都、和歌山、鳥取砂、姫路、大阪、宝塚など、かなりの機会に恵まれました。

私は、特に日本の城に興味を持っていたので、岡崎城をはじめ犬山城、大阪城、名古屋城、姫路城、青葉城というような日本でも名城のある地域を多く廻りました。

後期研修(半年)は、愛知県岡崎のブドウ専業農家内田金ノ助氏宅で住みこみ実習をしております。農家に移って私の研修は前期の研修とは大きく変化し、果樹試験場では合理的な面、実際の経営面において多少、不足とする点もありましたので、この点を補う意味においても採算を目的とした農業経営者の立場になって実習を重ねてまいりました。

新しい農家の生活は、山梨の下宿生活や試験場の先生と研修生という関係とは少し異なり、私は常に家族の一員として家庭に密着し、農作業は前期とは比較にならないほど重労働が多く疲れましたが、家族の方達の温かい心づかいと、広いお気持ちのもとに心身共に充実し、活発な研修ができました。

内田農園の農業規模は、全耕地2ヘクタールで総てブドウ園、内、巨峰種が1.6ヘクタール栽培されているので、私にはうってつけの研修地です。

実習としては、①ブドウ園の棚張り、②大型耕うん機、草刈り機による整地、草刈り実習、③防風林用の苗の育成、④病虫害に対する薬剤散布、⑤ブドウ苗の「寄せ接ぎ」接木実習、⑥ジベレリン処理栽培、⑦巨峰ブドウの栄養生理と施肥のやり方、⑧巨峰ブドウ栽培管理(全般)、⑨収穫と出荷(箱づめ)。以上のようにブドウ園経営に必要な総ての技術を御指導していただきました。

こうして、前期、後期を通し、異なった場所で同じ果樹の研修をしまして、私が実際肌で感じ身をもって学ぶことができた事は、農業経営におきまして、作物を育てることで一番大事なことは、いかに植物に対して愛情、愛着、努力の三つが必要であるかということです。どんなに高度な栽培技術を身につけても、技術だけでは作物は良いもの

は収穫できないし、決して、机の上の計算どおりには育ってくれないということです。

ブラジル移住地の農業にしても、現在の家族経営から、将来は企業の経営へと変わって行くともおられますが、私はたとえ企業の経営に変わったとしても、自ら先頭に立ち、作物と密着し土を愛しつづけて行く考えです。

帰国後は、なおいっそう頑張り、移住地発展のため、強いては、ブラジル発展のために役立ち、「我れ日系人ここに有り」と声高く、胸張ってブラジル社会の貢献に対し努力を惜しまないつもりです。

研修期間中、色々と御面倒をおかけしました国際協力事業団職員の方々、並びに直接御指導下さいました試験場の諸先生方、農家の皆様方へ厚く心から感謝し、お礼申し上げます。

「応募の動機」

ブラジル国・サンパウロ州・ビニャール移住地
広瀬昭憲



私が家族と共に1967年2月10日、農業を志し渡伯して来て7年半、すぐこのビニャール移住地に入植しました。

入植当時は、ブラジルの習慣、言葉はとにかく、ビニャール移住地の事は全然わからず、先輩の方々の体験談や当移住地の適作などいろいろな事をうかがったり、技師の意見を聞いたりしました。

今日までイタリア・ブドウを主作に農閑期には、蔬菜類を作って来ました。その間には楽しかった事、悲しかった事、困った事、苦しかった事などいろいろな事がありました。

その困った事が、入植2年後に起りました。イチゴを作った時です。あまり日照りが続くので、水をかけようと思いポンパをかけに行ったのですがかからないんです。あっち、こっちといじりまわすのですが、機械の事は全然と言っていいほど知らないで、ポンパの方はかかってくれません。イチゴの葉は弱っていくように思い、とても困りました。

またこんなこともありました。それは入植5年後のバーゼン（いんげん豆）を作った時でした。うね切り、肥料入れ、種まきも終り、スプリングクラーで水をかけていた時です。きゅうに水が出なくなったのです。この時まで5～6回ポンパの故障があったので、少しはわかるようになっていましたが、この時はわかりませんでした。しかたなく技師（サンパウロ市）の所へ持って行きました。でも2日待っても、3日待ってももどって来ないのです。さいわい3日目に雨が降ってくれたので助りましたが。随分待ったあげく1週間目にやっとなおってもどって来ました。

動噴の故障は水あげポンパの故障よりも困ります。1週間前から変な天候で雨が降ったり、霧雨の日が続き、イタリア・ブドウも実が付き始めた時でした。この天気で葉に病気が入っており、今

日はひさしぶりに雨もふらないので消毒しようと動噴のモーターをまわすのですが、動かないのです。このように作物に病気が入っている場合とても困ります。このような時、もう少しでも機械に詳しくればとても残念です。

これは私だけではなく、当移住地のほとんどの人が経験された事だと思います。そしてこれからも経験する事です。機械の事を覚えようと努力はしていますが、なかなか容易に覚えません。

この村もそうですが、ブラジル農業全体が年々機械化されている現在、これから増々機械に接する事がふえると思いますが、こう機械に弱くてはとても心配です。

そんな時、移住者子弟技術研修生の事を知り、ぜひとも日本の進んだ機械技術を学んで来たいと思い『ゆうかり』と言う、第1、2回の研修生の皆さんの書かれた本を読み、益々行って勉強したくなりました。そしてブラジル農業の発展につくして生きたいと思います。

「日本での技術研修を終えて」

限られた1年半の研修期間が終りに近づいても何も感じなかったのに、こうして“日本での技術研修を終えて”という題で、レポートを書こうとペンを執ると、過ぎ去った期間中の楽しかった事辛かった事等、様々な思い出が浮び「研修も終るんだと実感として身体に伝わって来ると同時に、帰国後自分が研修で修得した技術を活かし、地域社会の繁栄の為、しいては農業全般の発展の為にできる限りの努力を尽くしたいと考えるのです。

今考えると、アッと言う間に過ぎてしまった様な気がする1年半だったが、訪日してからの数カ月というものは、生活の不慣れ、研修が思う様にいかず焦り、また相談しあえる友もいなく、自分なりに思い悩んだものでした。

さて最初の1ケ年は14の時まで育った故郷である福井県での研修であった。当初からの研修目

的であった農業機械の整備を学ぶ為、県農業試験場に於いて基礎から勉強、農業機械というと小型ガソリン・エンジンぐらいしか使用していなかった為、まったくと言って良い程、農機の知識を持っておらず、当初は訳も分らず諸先生方へずい分御苦労をかけた様です。僕としても農機に関する参考書による勉強、トラクター耕転機等操作実習による一般知識の修得と無我夢中であった。

当試験場はまわりを田と山に囲まれ、とても環境の良い所にあり、若い職員の人達と昼休み等自分達の思想、ブラジルの話等に熱中したり、スポーツを通しての交流、また電車、バスと乗りつき1時間近くかかって毎日通った事、そして多くの人との出会い等、研修以外にも多くの事を体験、又学ぶ事ができた。

また12月から4ヶ月は試験場の方々とも相談した結果、実技研修という事で民間企業クボタ農業機械の営業所へお願いし、試験場では学ぶ事の出来なかったトラクター等農業機械の修理実習を修理工の1人として生の研修を受ける事が出来た。わずか4ヶ月と短い研修期間であったが、技師の御指導もあり、自分でも一応一般の修理は出来る様になったのです。

後期研修は、3ヶ月を茨城県内原町にある農林省農業技術研修館、残る3ヶ月を北海道札幌市に近い北海道中央馬鈴薯原種農場で前期の研修とは違い、農業機械の操作等実習が主体の研修であった。

農業技術研修館ではガソリン、ディーゼル内燃機関の分解、組立てからトラクター基本運転、農作業機操作実習、大型コンバイン実習(麦収穫)、電気溶接の基礎実習、水田稲作機械化研修、飼料作機械化作業実習(モータ・コンディショナ、フォーレージ・ハーベスター等の牧草関係の作業機とか牧草乾燥施設研修)、大規模乾燥貯蔵施設研修(カントリー・エレベータ)、園芸施設の設備機器と操作研修、大型建設機械操作研修(ブルドーザ)と数多くの機械研修が出来た他、大特、ケン引運転免許試験に合格出来た事、同じ年頃の助手達と飲み、語り等があった。また北海道中央馬鈴薯原種農場では、馬鈴薯収穫、馬鈴薯防除として薬剤散布プランによる耕起、堆肥散布、それにダンプの運転から暗渠排水の設置等機械研修

以外の勉強が出来、又温かい人間関係を深める事が出来た事は、研修と共に一生忘れる事の出来ない青春の思い出の一つとして心に残る事と思うのです。

また、これらの他にも同期研修生合同研修、農村青少年技術交換大会等思い出に残る事がたくさんありました。

最後に貴重な機会を与えて下さい、お世話して下さいった国際協力事業団、そして御指導して下さいった諸先生方に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

「応募の動機」

ブラジル国・サンパウロ州・ムンドノーボ移住地

田 中 愛



私は1961年、6才で父母と共に、ブラジルへ移住して来ました。入植以来、父母の努力により、耕地は果樹がりっぱに育ち、美しい緑を年中見せています。

私は、移住地を、この上ない良い所と思い愛着をもっています。

父母は、苦勞しながら私達姉妹を通學させてくれています。高校に入り、家庭科の勉強をするようになってからは、1日中、汗をながして働く母の姿をみて、農村婦人のあり方につき、いろいろと考えさせられることが多くなってきたことに気づきました。

働く姿は、何よりもとおく見えます。しかし農村の生活はなぜか文明社会からとりのこされ、恵まれないような気がするのです。良い生活環境の中で働いて、ゆとりのある農村生活をするのができれば、自然を相手にして、ほかの職業よりはるかに楽しく、くりがいがあふれるにちがいないと考えはじめました。将来、私も大地を相手に農家の主婦となって生きていくつもりです。現在の生活を向上させるにはどうしたらよいだろうか。それには生活の改善をめざしていかなければならないと思うのです。

では、どうしたらよいのか、どういう方法があるのかと、日頃考えてくっていました。たまたま雑誌で、日本では生活改善が進んで、婦人が中心となり、明かるい生活環境を作り、楽しく働けるように努力している様子や、すぐれた指導員がたくさんいて、生活技術を指導していることを知りました。

農村婦人の労働時間、食生活の工夫、育児、衛生、趣味、娯楽、たくさん問題があります。

もし私が、日本へ行けばしたら、しっかりこの目で農村の生活を見、指導をうけて来たいのです。

生活改善をはかり、移住地の婦人と共に、心豊かな生活ができるように努力したいと思います。

またコロニアの農村社会のためにも、お役に立ちたいと考えます。

空気のきれいな、自然に恵まれた農村に住んで、文化生活を送りながら、働けたら、人間のくらしとしては、最上のものと信じます。

「1年が過ぎて…」—研修中の報告から—

冷たくきびしい冬が過ぎさり、ホットひと思つたことでカゼをひいてしまいました。°ベットの上で1人ぼっち……。いろんなことが頭の中に浮かんできます。

ここ秋田県立農業短期大学に来て1年間をくらし、いろいろなことに出会い、いろいろなことを学びました。まず生活科1年生として、おもに私の目的であった衣服関係を主とすることができ、専門教科として畜産概論、果樹園芸学、野菜園芸学、調理化学、農家経営、農村生活調査論をとりました。また、いっばん教科としては英語、生物もとりました。

寮では3人べやで生活を共にして、姉妹のようにあふるまい、一緒に笑い、泣いて悩みごとをぶつけあいながらここまでできました。そして、だんだん寮生の考えや行動がわかるようになり、少し時間はかかりましたけれども、自然にみんなの中にとけこんでいけるようになりました。ブラジルの青年に比べて子どもっぽいと思っていた彼らでしたが、話しをしているうちに私自身があまりにも幼く、わがままなことに気づき、恥しいくらいでした。

日本の若い人たちの考えや物の見方を知るためには、いろんな集まり、とくに大学の総会にはかならず参加し、いろんな意見を聞きましたが、あまりにも形式的で物足りなく感じました。しかしコンパではせきよく的に自分たちの気持ちを出してくれたのでびっくりしました。ふだんはおとなしく、めだたない人が人間味あふれていたことを知り、またふだん悪い噂がたっている人でも、

ほんとうはいい人だったりして、世界中どこでも同じだと思いますが、私はここで、初めて人間の裏にかくれた真の心に気づきました。今までは、ささいなことにも腹が立ち、みんなにめいわくをかけたこともありました。そして何もわからない私にとって、寮生たちのつき合い、与えられた授業、私個人の勉強……。あまりにもかぎられた時間につかれて、クラブ（茶道、花道、社交ダンス）をさぼりました。しかし、今では自分でもおどろくほどおちついて、物事を考えてから行動をとるようになりました。

最後に、今書いてきたことがちっぽけなことのように思いますが、私としてはせいっぱい、この1年間でえたしゅうかくなのです。これをきかいにして、残された時間を有意義に使ひ、これからの自分に役立つようなことがもっとたくさん、みつければと頑張っている私です。

「学 び た い 事」

ブラジル国・サンパウロ州・グッタバラ移住地

小 林 武 久



小生は、研修科目を「養豚」と「農業機械」の2つを選考したが、「養豚」については、以前から多少の興味は持って居り将来養豚をやってみたいし、また伯

国でもこれから養豚が伸びて行く可能性が現われて来ている、と言う事から選考したものである。こゝは選考の動機になるが、これについて学びたいことは、養豚経営の在り方、つまり省力化、糞尿処理法、伝染病予防法など、あるいは飼料の配合、品種の選定、販売方法等みっちりと学びたいと思う。

特に糞尿処理法は具体的に畑に散布されたり、浄化して川に流したり、また糞尿から出来るクロレラ菌の培養などどんなものを学び、これらは伯国ではまだ研究が進んでおらず、帰伯して役立ててみたいと大変興味を持っているものである。

又、豚舎の清掃、飼料の補給などの機械化による省力化など、農業労働者が工業地帯に流出しつつある伯国では必須項目であると見る。

次に「農業機械」に移るとしよう。これは事務所を訪ねた際、小生「農業土木」を希望したがこれは基礎から覚えねばならず、非常にむずかしいとの事で「農業機械」になったが、これについて学びたい事はやはり農業の機械化による省力化で、主に機械の多くは雑穀類栽培に使われて居り、どの様な機種が有り、それがどの様な能率、仕事、結果などをもたらすのか、又、機械の管理、維持、扱い方など重要であると思う。

特に稲作は雑穀類の中でも比格的栽培が難しく、グッタバラの場合は、小面積で収量を上げるべく、人力労働による水稻栽培が行なわれているが、なかには田植機を導入、すでに機械化している人も若干居り、その一方直播栽培も最近は多くなって来て、田植から直播に徐々に移りつつある。この現象は年々稲作をやめたり、機械化に切り変える者が増えて来たため、田植の人手が少なくな

り、やむなく直播栽培に移らなければならないと言う所にあるからで、田植機を購入するにしても日本直来の物は高価なため、仲々手に入らず米作者の頭の痛い所である。

又、先ほど書きましたが、農村労働者が少なくなって来ているのもその中の一つと言えるだろう。

こうした現況の中で、将来稲作の機械化による直播栽培が主となる事を予測するものであり、直播栽培の整地から収穫までの間に使われる機械類を詳しく学び、それを応用して役立ててみたいと思う。

以上、2つの科目について書いてみましたが、この他、文化活動の方も少し身に付けてみたいと思う。このグッタバラを見てみると、青年達を始め、協調性、団結力に欠けていると思う。

そこで出来れば日本の活潑な文化活動、レクリエーションなど色々と身に付け、グッタバラだけでなく外部の人達とも親睦を深められるように、協調性、団結力のある、そしていつも笑顔で話合える明るい文化村になる様努力したいと思うものである。

最後に現地と内地の青年の間で提携が盛んになる様、多くの青年達を紹介してあげたい。現地の日系青年の日本語の維持のためにも良いと思う。

「研修を終えて」

1年間の養豚研修、半年の農業機械研修、昨年4月に訪日してから早や1年半の期間を終えようとしている。今、最後の仕上げとして、過ぎさった日々を思い起すと実に数多くの人と知り合い、技術を得て、あちこちと歩き、色々な事を見て来たつもりだった。しかし、それはまだごくわずかなことであって、まだまだ知らないことばかりが身の回りにたくさん残っているし、それは一生かかっても覚えられる量ではないことと思う。

毎日下宿から自転車で、北アルプスの雄大な姿を見ながら研修に通った1年間。約4キロの道を

車の流れに注意し、ある日は雨にぬれ、ある日は強風にあおられ、天気の良い日は最高のサイクリングになり、冬が来て冷たい風を切り、ある朝は凍った道路ですべってころび、ヒザをイヤと云うほど打った。25cmも積った雪道をそれでも強引にペダルをふんで下宿へ帰ったこともあった。そんな時、下宿のわが部屋はまるで母親の様にあたかく主を待っていてくれた。

こうして通った1年は、豚のことについて学び、色々な技術を知り身につけた。去勢、消毒、注射、と殺解体等、こまかな技術はすぐにも応用でき、また大きなこととしては、人工受精によって繁殖豚を有効に使うこと、肉豚の枝肉の見方、病豚の手術などがあげられる。その他、ゲージの中に入れて飼育する方法、人口哺育によるSPF豚の生産、ふん尿処理、施設関係等、参考になるものや見聞を高める物が数多くあった。中でも、面白く学んだものは、人工受精でのホルモンの働きであった。新しい生命の発生をうながすホルモンの役割りは、非常に重要なことであると感じた。

残りの半年は農業機械について研修を行なったが、前期3ヶ月は茨城県内原町にある農林省農業技術研修館、後期は北海道札幌市に近い中央馬鈴薯原産種農場にて実習した。

小生の場合、農業機械というよりも機械を使っている畜産法を体で学ぶべく、茨城でその基礎を、北海道でその実習をするつもりであったが、相にく同研修機関にはその方の専門的な先生が居らず、思い通りに行かなかったことがザンネンであった。

しかし、この2ヶ所での研修は決して無駄になったわけではない。内原では、ディーゼル、ガソリンエンジンの分解整備、故障車の修理実習、トラクター作業の基礎知識等、諸先生方からあたたかい御指導を受け、又、各種のアタッチメントや大型コンバイン、ブルドーザーなど大型建設機械の操作法と作業のやり方など、小生の知らなかったことを実習の中で学べたことは大きな収穫だった。

北海道ではそうした機械の実習を主に行なったが、ここで新たにトレンチャー、バックホー、モーター、ポテトハーベスターなどの使用技術をマスターした。機械の操作だけでなく、イモひろい、イモの箱かつぎ、ハーベスターに乗ってイモの選

別、ヘイ・レージの運搬、イモ収穫後のゴミ処理えんばくの収穫、などの肉体労働の他、はては測量、暗きょの設置、ダンプの運転からお茶の用意と多種多様なことをやって来た。

しかし、こうした変化に富んだ作業を小生は苦にせず、進んでやって来たつもりだ。むしろ楽しかったと云えよう。

農場での生活は、土、日曜日は自炊し、ふろも自分達でわかし独立したものであった。

内原からいっしょになった広瀬君と約半年の間いっしょに暮らして来たが、研修のこと、旅行のこと、友達のことなど話したり、たまには意見も違って言い合ったり、不満を言い合ったり、良い時も悪い時もあったけれど、2人の共同生活は楽しく、貴重な体験となった。

長野にいた頃、いつも夜遅くなってそれでも必ずお茶づけを食べて帰ったサークル。ブラジルの青年活動を活発にする何かを見い出そうと入ったサークル。職業病、賃金、反戦など、反戦意識を述べては、小生とはかけはなれたような事ではあったが、自分達の生活を守ろうとするサークルの人達の姿を見て、ちょっと日本の生活の一部をのぞいたような気がする。

荷物かつぎ合いながら2,670mの新雪の山に登山した“どじょっこ”(会の名)の人達にも、一晚泊りであそびに行った時、飲みつぶれてずいぶん世話になってしまった……。

生まれて初めてすべったスキー、町の中をハンゴして飲み歩き、ふざけあった日。

雪の降る夜、下宿で寒さにちちこまってねた夜……。寒い日も暑い日も、つらいことも、楽しいことも、いやなこと、うれしいこともあった1年半。

こうして思い返すと過ぎ去った日々が次々と頭に浮んでくる。日本での技術研修も青春の1ページとして一生忘れることができないだろう。

小生は技術的なことはもちろんであるが、こうした色々な体験や知り合った多くの人達との人間関係を大切にしたい。そして、人間関係から磨かれた少しばかりの社交性と技術を大いに活用し、帰国後は人のためにも、自分のためにも体の続く限りがんばりたい。

こうして研修を終ろうとする今、これから先の

ことを思うと不安の心もかくせないが、自分1人でがんばろうとせず、回りの人達と共に学び、力を合わせてやってやろうと、いつかは研修の成果が現われることを信じ、心を新たにこの1年半の間あたたかく御指導、御便宜下さった方々、そして、この技術研修をさせて下さった国際協力事業団に深く感謝致します。大変ありがとうございました。

「学びたい事」



応募の動機と致しましては、現在のブラジルの農業は大きな曲角に來ているのではないかと思います。つまり現在の日本農業の如く多角経営が必要になりつ

つ有るのではないかと考えたのが原因です。私は兄弟と共に養蚕に励んで居りますが、現在の化学肥料の値段ではとても採算が取れない。そこで考えたのが養鶏なのです。

小面積で飼育出来、そして桑園に一番必要な有機質はどんどん取れる。その有機質を桑園に施し蚕種増立量を増し、収入を倍にしたいと願って居る訳です。

勿論現在の卵の暴落、鶏肉の安価も考えましたが、何時迄もこの状態が続く訳でもないでしょうし、合計231haを最大限に使用し、とうもろこしも多少は自給自足すれば十分に採算が有ると思います。養蚕プラス養鶏を考え、それにはどうしても日本の様な進歩した養鶏を勉強したいと願うのです。

「日本で技術研修を終えて」

私は男兄弟4人の3男、三重県多気郡宮川村で生まれ大阪で育ちました。昭和32年4月15日、私が8才の時一家揃って神戸港より資源の国ブラジルへ渡りました。丁度その頃神戸では桜の花が満開で、それが印象的でした。同年6月10日目的地に到着し、以後約5年間私達以外に日本人を見る事もなく、又学校も縁の遠いことでした。私の生れ故郷もあまり知らず、只、私の頭の中で描いていた事は、「日本は文化の発達した国」ただそれだけでした。しかしどの程度発達しているのか見当が付きませんでした。数年前から一度我が生れ故郷を目で見て体験して知りたいと常々思っていました念願が、事業団のお蔭をもって叶えられました。

ブラジル国・パラナ州・日光移住地

中村 清

昭和50年4月9日、東京国際羽田空港に到着しました。私は嬉しさと、或る大きな目的達成の闘志を燃やしながらクラブを降り、18年前の桜の花の印象が甦がえり、故郷の空気を吸いました。待合室には事業団の方々、そして49年度の4回生として来日して来ました、私の兄も迎えに来ており、1年振りで再会し、何かと私は心強かった。私達は4名のグループで、ニューヨーク迄ブラジルのヴェリク機で来て、ニューヨークからアラスカ経由の日航機ジャンボに乗り替えた。

ニューヨークには2泊3日滞在して、ニューヨーク都市内にそびえ立つエムパイヤ・ステート・ビルに上り、自由の女神や国連ビル、その他各名所を見学し素晴らしい旅でした。昭和50年4月11日、採卵養鶏を志願致しまして、三重県の三重県農業経営大学校に入学させて頂きました。当大学校の修学年限は1年、言わば短大のようであり、日本或るいは世界の農業の後継者育成所とも言えるでしょう。当大学への入学生は年々減少しているとの事でした。私達の年は更に減り、私と共に14名で卒業後何れも皆自営して行く計画を立て、仲々農業に熱意を持った者達でした。私が感心したのはこの少数名の中に東京、大阪の大学を卒業した者が農業に転向し入学していた事です。小学校1年しか出ていない私には、実に羨ましい事でしたが、日本の現状を月日が経つに従い知った時、彼等の考えに無理はないと思いました。

当農業経営大学校の規則は6:30時起床、6:40時より7:00迄で体操して、7:00時より7:30時迄各自の部屋と講内の掃除をする。講義は9:00時より16:00時迄受け、17:00時夕食、19:00~20:00時入浴、毎週1週間ごとに2名ずつ食事当番及び週番を交替で勤め、21:00時門限及び点呼を取り、22:00時消灯、しかし寝静まるのは消灯後1~2時間経ってからでした。私がブラジルから来ているせいか、当大学校の寮に泊っていた皆は私に興味を持ち、殆んど毎晩のように私の部屋に集まり、両国の事を夜中

の1:00頃迄話し合い、自由時間と言えはそれ以後でした。その日その日に受けた講義を理解するには、彼等以上と言うよりも、兎に角がむしゅらに勉強しなければついて行けなかった。休む時間が惜しく睡眠時間は平均3時間程度でした。

実際、学校にいた期間は半年間で、後の半年間は第1回、第2回とに分け、学校側から自分達の専攻の農家へ全員派遣され、実習致しました。私の専攻は採卵鶏でしたので、第1回目の農家実習は45日間で丁度夏期でした。農家の位置は三重県内の安曇郡芸濃町で、飼育総羽数1万8千羽でした。飼養体系は初生ピナを導入しての方式で、成鶏が常時1万6千羽でした。飼料は初生ピナ用は市販の完全配合飼料を購入し、中雛、大雛、成鶏用は原料を購入して自家配合して給餌していた。給餌法は、手押配餌車を使用しての手給餌法でした。第2回目の農家実習の位置は、周囲は山々に囲まれ、如何にも日本と言った感じで、忍者の里と言われている伊賀の山郡の養鶏場へ実習させて頂き、飼養規模は2万3千羽で、飼養体系は、120日令位の大雛を導入しての方式。

家族経営で機械化は殆んどして居らず、半自動程度で飼料は農協より完全配合飼料を購入し、経営上の内容は余裕があった様でした。当伊賀での実習期間は9月15日から翌年の1月末迄の秋と冬をはさんでの4か月間でした。秋は紅葉で美しいものでしたが、冬は寒に耐えました。伊賀の冬は東海地方でも有名で、北海道の冬と変わらないそうです。四方の山々から吹き降ろして来る乾風の冷たさは十分身に染みて一生忘れられません。

さて、農業経営大学校での講義の科目は、先ずは専攻、土壌肥科学、栽培原論、農業経営学、農業簿記、農業経済学、農業機械学、農業政策論、以上のこれからの農業に欠く事の出来ない根本的な事を学び、3月17日農業機械士技能認定手帳並びに、技能認定証と経営大学校の卒業証書を頂き卒業しました。

(経営大卒業後の研修)

3月17日に三重県農業経営大学校を卒業致しまして、引続き2ヶ所の研修先で勉強致しました。第1次の研修地は日本で大規模に入る30万羽養鶏場でした。此の羽数を3区に隔離育成しておりました。その「隔離育成」の目的は病気を防ぐ為

とのこと。私が研修致しましたのは、規模1.0万羽の第2養鶏場でした。主に育雛・育成の管理を研修致しました。第2次は現在まで学んだ事を通して研修終了の最後の仕上として、三重県農業技術センター畜産部に於いて、養鶏技術の理論的な事を学びました。

(日本で修得した技術及び知識)

昔の農業と言えは、本を読み研究をする事も記憶することもなく、又機械も使う事もなかった。しかし現代の農業は集約的で、如何にして生産性を向上させるかということで、それにはそれだけの知識・技術を身に付けていなければ現代の農業経営は成立って行かない事を日本に来て十分知る事が出来ました。

(結 び)

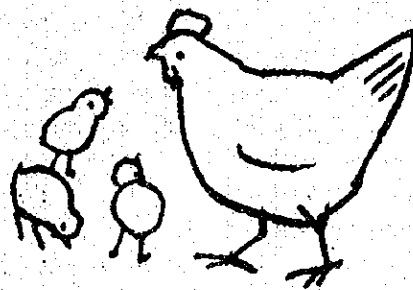
1年半の研修も終了間際になり、この歳月を振り返ってみると、生涯忘れてはならない思い出多い歳月でした。経大大学校に入学した頃は慣れない生活で、1日が長く感じた日々もありましたが、周囲の人の暖かい志しのお蔭で日本の生活にも直ぐ慣れました。有意義な研修を終えたいと思い、為地の農村青年会に仲間入りさせて頂き、出来るだけ多くの人達と接触し、見聞を広める事に努力致しました。都市化されつつある日本農業、その都市化に対抗しながら活躍する彼等の行動は素晴らしいものだと思います。今後とも日本農村の仲間との交流を図り、農業の素晴らしさを一般の人々にも判って欲しいと思います。

日本の農業は殆んどが兼業であり、その中で専業と言えは、畜産が殆んどである。専業とは言え、養鶏の場合だと飼料や原種鶏等は海外より輸入しており、つまり第2次産業といわれている。

日本の養鶏は成長期から安定化の方向に向うべきである。近年国際的経済変動の波を受け、今後とも先行き不安要因をかかえ、経営の安定を期待し難い現況にある。特に養鶏経営の基盤をなす飼料原料の長期的逼迫傾向に対処して、飼料の確保と価格の安定を図るにどう対処するか、鶏卵、鶏肉の消費動向はどうなるか。需要に見合った計画生産はどう進めるべきか、環境汚染の抗議に対してどう対処するか等、養鶏経営の安定を阻害する幾多の問題をかかえる日本の養鶏、それに関わらず飼養規模の拡大を主体とした経営の近代化が

進んでいる。

最後に関係者の皆様にお世話になりました事を、
心から感謝すると共に、終生忘れがたき御高恩の
お礼を申し上げます。



「私の学びたいこと」



私は、丁度10年前に定時制の農業高校を2年で中退し、両親に連れられて、パラ州トメアスー郡の第2トメアスーに入植しました。

トメアスー郡はブラジル

唯一のビメンタ（胡椒）の産地で知られております。そのビメンタのほとんどを私たち日本人が栽培し生産しております。

生産されたビメンタは、北米、南米、遠くは欧州の国々まで輸出されております。

トメアスー郡はつい昨年までは陸の孤島と言われておりましたが現在は、道路が開通してからというもの交通の便が非常によくなり、最近のトメアスーの発展ぶりは目を見張るものがあります。私が入植した当時はビメンタの価格も混とん、低迷としていた時期もありましたが、ここ3、4年前から上昇を続けており、ビメンタ景気が続いて喜ばしく思っております。しかし反面、近年になってからビメンタの病害が猛威をふるいトメアスー全域にまんえんし危機に立たされております。

病害による短命、価格の変動による暴落、また今年のような天候異変による災害等は私たち農業を経営する者には、始終、念頭においておかねばならないことであります。そういうことからビメンタだけの単一栽培の危険性は前々から取り沙汰されており、近年になって第2作物としてカカオ、ゴム、カッフェ、その他香辛料作物が植え付けされておりますがこれらまだ研究の段階で本当に適地、適作かまた、採算面を考慮した時経営が成り立つかどうか疑問とされております。

そういう訳で第2作物でビメンタに匹敵するものは現在のところなく多くの方が現在のビメンタ景気に乗じてビメンタだけを追ってよそに耕地を求め移転しているのが現状です。ここで私が疑問とするのはよそに移転してもそこに安住の地が得られるか、と言うことです。言わずもがな、それは否です。ビメンタだけを追って行けば、今の線

ブラジル国・パラ州・第2トメアスー移住地

平 水 繁

り返しをするだけで一生安定した生活は出来ませんし、またそういう半略奪的な営農法はブラジル社会へ貢献どころか破壊的行為でしかありません。そのことを考えます時、事の重大さを痛切に感じます。そこで私はこれらの問題を解決するには、ビメンタの廃園利用とこれからの将来性のあるもの、を考え合わせた時牧畜が一番有望だと考えます。最近特に問題になっている世界の人口の急激な増加による食料不足、たん白源の不足で肉類は高騰の一途をたどっています。そして世界的な食料危機を救うのはアマゾンだと言われているのも私が有望視する一因であります。

この広大な土地、大小無数の河川を有する自然条件の整ったこのアマゾンでの牧場経営は私の夢であり目標であります。また他の人々も牧畜に関する熱が非常に高まってきております。

中にはすでにビメンタの廃園を利用して少しつつ手がけている人もありますが、それは野放しの粗放的なやり方でしかなく、牧畜に関する予備的な知識、まして技術等は無い等しくまた指導者もなく暗中摸索としてやっているのが実情であります。そこで私は今回の子弟技術研修生に応募して畜産部門を専攻し勉強したいと思っております。日本の高度の技術、諸知識、また経営法等をぜんぶんに勉強し修得してこれからの地域社会の発展に積極的に貢献する考えであります。

「研修を終えて」

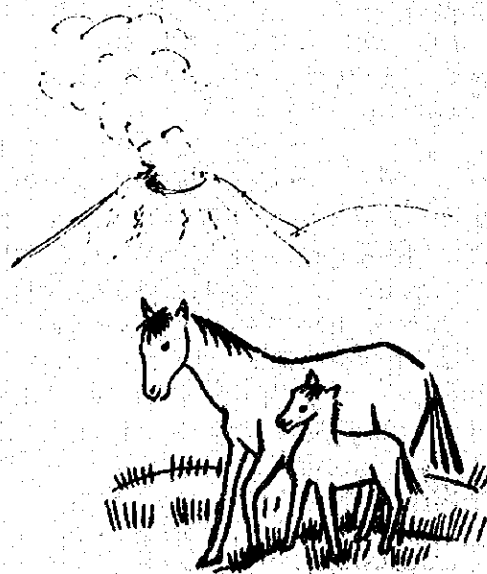
私の住むブラジルパラ州のトメアスー移住地はブラジルでも唯一の胡椒の産地として知られトメアスーと言えは胡椒、胡椒と言えはトメアスーと言われるくらい有名な所です。ところが近年になってこの胡椒に病害が大発生したのです。今までほとんどの人たちが胡椒栽培1本に生きてきただけにこの病害は移住地の死活問題となる程、深刻化しております。今ではその対応策としてカカオ、カッフェ、マラクジャ、メロンと言った第2、第

3の作物が胡椒の庭園を利用し、どんどん植えられ従来の胡椒1本立ての単一栽培から多角経営に移行しつつあります。私の将来の夢はブラジルの広大な豊かな自然を存分に活かした牧場を経営することです。時代が進むにつれ人々の生活が向上し豊かになればなる程肉の需要は増えていき、将来性が十分にあると考えるからです。移住地の人たちが最近になって牧場熱が高まりすでに始めている人も2、3ありますが誰も牧畜に関する知識や技術はなく現地式の粗放的なやり方を見よう見まねでやっているのが現状です。このような時、たまたま技術研修生の募集が目にとまり、一つ日本の進んだ新しい知識や技術を勉強して見ようと思い申し込んだところ幸いにも推せんして下さり合格しました。そして昨年4月牧畜の研修を目的として大きな期待と希望に燃えながら祖国日本の土を踏みました。それから1年半「光陰矢の如し」と言いますがあっという間に過ぎ去ったような気がします。この1年半の研修を振り返って見ますとまず昨年4月から今年の3月までの1年間、熊本県の阿蘇郡にありますが、草地畜産研修で研修をしました。ここは阿蘇外輪山標高900メートルに位置していて夏は涼しく快適でしたが、冬は零下15度まで下がるような極めて自然条件のきびしい所で10年間も常夏のアマゾンで暮らした私にはこの寒さは骨身にこたえました。当研修所には私の外に27名の研修生がいて私も彼等と同じ条件の中で寝食を共にして学び、スポーツをして楽しんでできました。朝は6時起床、国旗掲揚にはじまりラジオ体操、寮棟の清掃と規則正しい団体生活の中から色々なことを体験しそのむづかしさ、また楽しさを知り社会生活のあり方というかそんなものがわかったような気がします。研修内容は午前中講義、午後は実習という実践を通じた習得を基本方針として、草地畜産経営に必要な科学的技術と企業的能力を培うと共に全寮制を通じて強健にして自主性ある畜産人を養成するという研修教育の方針で私も高校は1年しか通いませんでしたが、他の研修生には負けてはならないと久しぶりの学業に闘志を燃やし専念してきました。研修のコースが酪農コースと肉牛コースに別れており私は肉牛を専攻しました。総面積400ヘクタールを有する当研修所は面積規模からも九州1と

言われる程でそこには乳牛、肉牛合わせて300頭近くが放牧を主体とした省力多頭。そして無畜舎方式によって飼養管理されており私にはまさに見本となるべき牧場の体系で非常に参考になり勉強になりました。学科については農業を営むに必要な農業経営学、農業簿記、土壤肥料、そして専門科目では草地造成利用論、家畜飼料学、解剖生理、家畜繁殖学、家畜衛生学等について学びましたが、中でも特に農業経営学については今までの我家の無計画かつ粗雑な経営のあり方を大いに反省させられました。これからはもっと経営的観念を持つと同時に農業簿記による記録記帳を大切に経営内容を常に分析、把握して計画性ある無駄のない充実した経営をしなければ大成は望めないと痛切に感じました。それから実習においては一般飼養管理をはじめとし草地の肥培管理、冬期における貯蔵飼料の調製、除角、去勢、発情鑑定、妊娠鑑定そして人工授精と牧場経営に必要な基礎的な学科と実習は一通り行ないました。最後に家畜人工授精師の国家試験がありましたが、これには全力投球し毎夜午前1時～2時頃まで勉強しその甲斐あって合格し免許を取得することができてうれしく思っております。これら習得した技術や知識を気候、環境、立地条件の全然異なる現地において如何に応用するかということですが、現地の牧場といえますのは全く粗放的で放任主義で飼養管理には全然手を加えず広大な土地にものをいわた完全放牧による自然からの略奪的経営です。従ってちょっとした技術や知識を応用することによって素晴らしい牧場経営ができると確信しております。牧畜の研修については基礎的なことだけですが一通り理解できましたので後の半年は養豚の研修をすることにしました。やはりいきなり牧場をはじめるといのは相当の面積と資金が必要ですしその点では余必要としない、そして貴金の回転の早い養豚に着眼し、まず養豚で基礎作りをしそして徐々に牧場に切り換えて行こうと考えたからです。3ヶ月間は神奈川県農家の農家で実地研修し残りの3ヶ月は母県である宮崎で研修しました。神奈川県の農家では比留川さんという方のお世話になりました。家族は7人家族の大変にぎやかな家庭でした。ここでは一般飼養管理からエサの配分、病気の治療、お産時の処置の仕方、精液採取

及び人工授精の要領など身をもって体験し学びました。また共進会やせり市などにも機会あるごとに連れて下さり、種豚家として重要な素豚の選び方など教わり大変勉強になりました。それから比留川さんの家では養豚の外に梨園も経営しておられ、養豚と梨園の複合経営で豚の糞尿を梨園に還元することによって畜産公害を防止しながら、かつそれにより見事な梨園を作っておられ一挙両得の成果を上げておられました。比留川さんの話では梨園は多量の有機物が入ることから木は丈夫に育ち病気は少なく毎年平均した質のよい実がなりその上、肥料代が大きく節約できるということでした。このことから私は畜産と農作物の栽培は絶対に切り離せないものと痛切に感じ、胡椒の病害の一端がこの辺にかくされていたのではないかと反省し、現地に帰ったならば早速畜産を取り入れ胡椒との複合経営を実行するつもりです。比留川さんの家には3ヶ月間の短い期間でしたが実践そのものの養豚の実態をつかむことができ、また、日本の農家の一面をかいま見ることができました。そして家族の方々の心温い親切、寛容さ、人情豊かな人からふれ心から感謝しております。7月からは宮崎県の総合農業試験場内畜支場で農家で研修できなかった学問的なことや技術的な面について特に研修しました。この先生に養豚の指導で東南アジアに行ったことがあるという人がおられアマゾン地方が丁度気候や立地条件が似ていることからその先生について特別に指導を受けました。とにかく繁殖養豚についてはエサが一番大切だからということで学問については飼料学と栄養学を勉強しました。また実習においては、解体、枝肉調査、去勢、ヘルニアの手術等を行いました。養豚の知識や技術は現地においてそのまま応用できる面が多く大いに役立てることができると思います。以上のような技術研修の外にもこの1年半の間にはあちこちの優良農家の視察見学、山陰地方への研修旅行、三重県で行なわれた国民大育大会、そして東京で行なわれた全国農村青少年技術交換大会などにも参加させて頂き知識見聞を広めると共に数多くの貴重な体験をし、良き社会勉強人生勉強ができたと思っています。私にとってこの1年半の日本での研修生活は一生忘れられない良き思い出となると同時にこれからの私の人

生のかたにして大いに役立てまた地域社会の発展のためにもこれからも尚一層の努力をして行くつもりです。最期になりましたが研修の先々でお世話になった諸先生方や関係者の皆様、そしてどのような意義ある研修の機会を与え、1年半もの面倒を見御指導して下さいました事業団の方々に心からお礼を申し上げます。



「作文応募書」



ぼくは1953年度に、家
ぞくといっしょにブラジル
国に移住いたしました。ト
メアスーでようちえん2年、
小学校5年生を、そつぎ
うしました。ベレンに行っ

て中学校にかよいながら、タイプライタのめんき
うを取りました。そつぎようしてからは、父をて
つだってビメンタえんを10年やりました。ビメ
ンタは植えて2年目に1本200グラムとれます。
3年目からはよく手入れすれば3キロ位は取れま
す。さいきんは、根くされ病がひどいので皆も頭
をいためています。ぼく達4日クラブの友達もあ
つまって、いろいろ話合っているのですが、病氣
がはいれば消どくではとてもまにあわず、早い
のは植えて4年目位でかれ始めますので、その中に
カカオやゴムも植えています。材用になる木も植
えています。よそに行つて仕ごとを始めた人もい
ます。ぼくは友だちといろいろ話合つて、なにか
よい仕ごとをしたいと思つて話合つてみしたら、
いままじうだんで研修生をほしゅうしているか
らもうしこんでみたらといわれたので、今のま
いかいと思ひぼくはよろこんでおねがいします。

ブラジル国は土地もひろいし、ぼくじゅうでも
やってみたいと思ひました。それから農業きか
いもならんたいとおもいます。

ぼくは小さいとききたので、ブラジルで日語学
校はそつぎうしたのですが、長いあいだブラジ
ル語だけかいていたので、日本語はヘタですがや
つとかきました。お話はたいていのことはききと
れます。日本にいつて一生けんめいべんきょう
したいとおもいます。ブラジルはよい国だから長
くすみたいのです。帰つてきてからは、トメアス
ーはつてんのためがんばります。ぼくはブラジ
ルの自どう車めんきう証1964年にとりました。

ブラジル国・パラ州・第2トメアス移住地
遠 藤 憲 一

「日本での技術研修を終えて」

私は昨年4月より、福島県の畜産試験場に研修
生として入場し牧場全般を実習しました。私は国
に帰つて、肉牛の生産をやりたいと思いますので、
特に肉牛の繁殖と肥育を研修しましたので、私が
感じた点を申し上げます。

1. 日本の牛は体形がよく又資質のよい点におど
ろきました。又繁殖も大抵1年1産生させると
の事です。それは人工授精の技術のすぐれている
事です。私も人工授精の室で実習をしましたが、
その技術はわが国においてはとてい考え
られない精密で確実な手順において凍結精液を
作つておる事です。種雄牛のゆうしゅうなもの
をけいようし、その精液を県内広く利用して
おるので日本の家畜の改良は早く進む事がわかり
ました。又肉を生産する肥育においてもわが国
では見る事のできない、ちみつな管理によつて
日本の牛肉ができあがる事もわかりました。研
修も終り国に帰つたら、この体をもつて、身に
つけたじじゅうつをフルに生かし家畜の改良のし
かたとか、肉牛の生産のためがんばりたいと思
ひます。

しかしこの度、日本においてしゅうとくした
事をそのまま活用する事はできません。が、で
きる事もたくさんあると思ひます。日本ではせ
まい土地をフルに利用して収えきを高めようと
しております。このような土地管理をしなくつ
ても、わが国には広大な草地がありますので、
その草を利用して、ブラジルの牛を改良し、た
んかの安い牛肉を生産する事が私の仕事である
と思ひますし、それが此の長い期間勉強させて
いただいたおんれいとも考えております。

又われわれ父母にまけないような経営者になり
たいと思ひます。

われわれのために、ごしんせつにお世話やらし
どうをして下さつた国際協力事業団の先生方にお
礼を申し上げまして私の発表を終ります。

「研修生を希望するにあたって」

ブラジル国・ロンドニア州・トレゼ・デ・セッテンプロ 移住地
須 藤 毅



私の住んでいるブラジル国ロンドニア州は日本とほとんど同じ位の大きさが有りますが人口は20万人ほどでその中ポルトベリ市には約7万人が居ります。

われわれのコロニアは、ポルトベリ市より約15kmの所にあり18家族がようけいと野菜作りをおもにやっており玉子は95%、野菜も70%以上生産して町にきょうきゅうしております。玉子はとなりのアクレ州やボリビヤまで出荷しており、州内の山おくのこう山(2,3百kmはなれてゐる)へも野菜と一緒におくっております。

ブラジルは今アマゾン開発に一生懸命でそのためにはまず道路をつくらなければ人もすむことができないということで南から北、東から西へ又、ギアナからベルーへと北の国境にそって原始林の中を機械力でもってどんどん道路を作っております。

ポルトベリ市も10年位前にサンパウロまで道路ができてからものすごくはってんして来ました。地下資源もしだいに開発されており現在はいとくにすずの生さんがさかんです。いろいろなこう山物が開発されるようになれば人口も今よりもっとふえて行きます。今では車の数も1ヶ月100台から150台ぐらいふえており、われわれのコロニアにも自家用車、トラクター等をあわせると40台以上あります。コロニア内に修理工場がないためにこしょうした時には町まで車を引っぱって行くか修理人をつれてこなくてはなりません。仕事のいそがしい時にはとても不便でとまっております。町の修理工場へもっていても仕事にえいきょうします。町が大きくなれば玉子や野菜の生産をもっとふやさなければなりません。そのためには大型トラクターやこううん機をつかってやらなければなりません。その機械がこしょうした時、そのたびに何日も止ったのでは仕事ですすまずまことにこまるので自分でぎじゅつをおぼえれば人

をたよらずにどんどん修理ができるので、けっきょくは仕事のうりつがあがります。

ちょうど研修生のほしゅうがあったのでぜひ日本へいって勉強したいとかんがえて申し込みをいたしました。

自分のためだけでなく、コロニアのためにもなれるのではないかと思います。

「日本での技術研修を終えて」

日本での技術研修が今月で終わろうとしております。私くしにとっては日本に来る事が小さいところからの希望だったのです。さらに学ぶ事ができることは夢にも思っていませんでしたのでとってもうれしかったのですがその半面不安でした。それは私くしは日本の教育を受けてないことで、はたして日本の皆さんについていく自身がなかったことです。

私くしが南米ブラジル国に父母たちと移住したのは昭和29年の4月だったそうです。そのころ私くしはまだ物事の判断のつかないところだったのももちろん日本のことはなに一つおぼえていませんでした。

幼いころから日本の事を父母たちの話しを聞いて育ってきた私くしですが、私くし自身が思うのですが現在の日本はもう父母たちのころの日本とはちがっています。時代がスピード時代ですからこれは時の流れでしかたのないことでしょう…。でもやはり母国はすばらしい国ですネ…。

日本に来たばかりの時は自分が地球のどこにいろか見当がつかないほど信じられなかったが1日過ぎるたびに、日本にいろんだな、と言う実感かわいてきたのです。今思えば、この1年半長かった様で大変短く感じ、なにかアッと言う間に過ぎ去った気が致します。

この18ヶ月間を今日までの月日を振り返って見ると数えきれぬほどの楽しさ、そしてつらかった思いでが昨日の事の様に思います。楽しかった

事と言えば同じ南米諸国に於いて、一生懸命努力している同年代の青年達である第5期生の皆様と共にこの18ヶ月間、それぞれ目的は違ひにせよ生活出来た事を始めて日本の若者達と共に学び、遊び、楽しむ事が出来た事、そして研修の先々では現に活躍しておられる方々といっしょに学びながら働かせてもらったことです。そしてつらかった事は教科書に書いてある専門用語、むずかしい漢字、そして冬のさむさ……。

私くじが今日までがんばれたのは事業団の方々始めに学校の先生、ならびに友人のあたたかいはげましやごしんせつのおかげです。このごおんは一生おすれることはないでしょう。ほんとうにありがとうございます。

この1年半で下記のようなことを学びそして資格をもらいました。

1年間は宮城県立仙台高等技術専門学校で自動車整備を学びました。

- 内容：1. ガソリンエンジン 電気装置、塗装、板金、材料、自動車の
2. シャン 金、材料、自動車の
3. ディーゼルエンジン 歴史、工具の取あつかい
4. 溶接（アーク、ガス）
5. 法規
6. 製図
7. 社会
8. 体育

あとの半年は農業機械を(株)五十嵐商会で学びました。

そして1年半の結果として学校では、修了証書、合格証書、ガス溶接技能講習修了証、皆勤賞、そして3級自動車ガソリンエンジン整備士技能検定合格証書、3級シャン整備士技能検定合格証書、国際協力事業団の修了証書をもらいました。

この1年半の研修は皆様の御指導のおかげでぶじに修了する事が出来まして本当に有難うございました。こんどともよろしくお願い致します。

「応募の動機」



私は農業移住の子供として父母の農業経営の中で成長しました。朝から晩まで汗にまみれて働いている父母に手つだって私もはたしました。父は常に農業を多角的に安定した経済状態を作る事に苦勞し努力して来ました。まずヤンを植えラランジャ（ミカン）を植えてそれらが育つ間に野菜作りをやりました。野菜作りも初期は成績がよかったのでその利益は永年作物の管理と養魚の経営に力を入れました。野菜を沢山作るようになってからバイヤ州の生産物でどうにか間に合うようになりました。野菜品の中にヤン、ミカンを植え肥料を入れて管理をしました。養魚は池をたくさん作ってチラビヤ（草魚）を入れて毎日エサを与えて世話をしました。だんだん大きくなる魚を見るのが毎日たのしみでした。養魚池は1つづつ区切られているので魚を取り上げると池は太陽に干されてそのあとに葉野菜が植えられます。たんぼの中は青い新せんな葉野菜が一杯になります。たんぼの周辺一帯はシュシュ（カラスウリ）の棚になっていてウリがたくさんあります。池の水をうんと汲って毎日大きくなります。ブラジルは陽でりが強いので水が第1条件であります。私は現在勉学のためにサルバドル市に来て居ますが休みに来ますと小さい頃育ったこの土地に飛んでかえります。大池に草魚や雷魚がゆうゆうと泳いでいる事でしよう。自分たちを育ててくれた植民地をいかに発展させて行かなければならないかが子弟の仕事であると思います。

しかし天候や色々な問題が起り利益は思う様には上らずだんだんと行きづまりました。永年作物も短期作物もあらゆる作物の基本となるものは技術も大切ですが土地の力と気候条件であります。バイヤ州の日系人は野菜のほかにヤン、ゴム、ミカン、ビモンタ（コショウ）それに花作りとを合せて営農をして居りますがそれらを販売にまで持

ブラジル国・バイヤ州・サルバドル移住地
吉井大治

込んで居る者が成功して居ると思います。野菜作りの分野は植物の病気が強くなった事と肥料代金が高くなった事で経済的にどうにもならない時期に来て居ります。花どコショウ栽培で希望と活路を見出している状態であります。此で広大な土地を持つブラジル農業を考えます時牧畜経営こそは我々の最も望むところであります。ブラジルの牧畜技術と日本の畜産経営技術とを合わせてすばらしい牧場を経営して見たいと思います。小さな土地から大きな生産を上げる技術を修得して小資本から堅実に出発出来たならばコロニアを救う道はほかにはないと思います。

移住者子弟として研修に参加出来ます事は家族の人たちの喜びはもちろんのこと植民地全体の喜びであり発展でもあります。

皆様の希望に充分にこたえる事が出来るように全力で勉強して参ります。

「1年半の研修を終えて」

私は群馬県で畜産について研修をしました。

19年ぶりに踏んだ日本の土、そして、初めての東京、うれしい筈なのに私は不安を感じました。日本語が不十分の上、1人でこの人ごみの中で1年半もどう暮らせば良いか不安でした。が、同期生の下元さんと一緒に研修をすることになったので少し心づよくなりました。

研修先の群馬県畜産試験場で家畜を学ぶ機会が得られた。そこで私は研修期間、今までのスケジュールを大きく分けてみます。1年の前半は肥育と北海道の牧場実習をして、後半は乳牛と人工授精。そしてしめくくりの半年は、酪農事務関係と養豚の勉強をしました。

日本に来た頃は畜産に関して無知の私だったが皆さんのおかげで、今ではなんとかやれるところまでこぎつけたと思います。

日本の酪農はかなり進んでいるが牛肥育の方は南米とあまり変わらないようです。この研修で私は、

主に乳牛の育成、種付け、分娩、搾乳とか乳牛のもっとも多い疾患、ケトージス、乳房炎やその他色々酪農の勉強をしたので帰ってからは肉牛だけでなく乳牛ホルスタインも少しやってみたいと思います。

研修は牛だけでなく、豚の方も少しかじってみました。

養豚の實習では、良い豚の見分け方は肉豚は一種類のものだけでなく二種類、又三種類のものでかけ合わせることで生れ来る子孫は良い肉質をもつという……。たとえば純粋ランドレースのはん豚豚にデュロックやハンプの種をかけて出た子は純粋以上に赤肉をもつという勉強をしました。

現在、当試験では、牛の方にも雑種の試験をやっています。

日本と南米の養豚経営にきょうみをもつようなところがありました。日本での豚飼いは全てといっていいほど生肉用と加工用で脂肪はうすく、体に伸びがあるボークやベーコンタイプを狙っていますが、南米ではあぶらや脂肪の厚いラードタイプが主です。これは与えるエサの量でタイプが変わります。

ここで少し生活のことを書きます。

試験場の寮では団体生活のたのしさを知りました。休日にはみんなで卓球やソフトボールの練習をし、海水浴へ行ったりしました。

(北海道實習を終えて)

勇払郡早来町富岡の楠木家の酪農は現在の楠木辰美さんがはじまりである。

牛飼いになろうと決めたのは子供のころ知り合いにももらった一頭の子牛を育て、村の共進会に出したところ2等賞をもらったのがきっかけだそうです。

辰美さんは帯広農業高校を卒業してから酪農をはじめおなじく、帯広市、昭和21年で親牛4、子牛2頭と6ヘクタールの土地であった。

それからだんだん牛の数もふえ、その場所もせまくなり、牧場を手に入れた。そこに、僕が實習に行きました。

土地の面積60ヘクタール、乳牛80頭、機具はいろんなものがそろっていました。

北海道での生活、1日目の仕事は牛舎のベンキ

ぬりでした。この土地へ来てから5年目、毎年色をぬりかえるきれいな辰美さんでした。

仕事に関して、朝早くから夜はおそくまで頑張る……ここ、雪国では、1年のものを、夏の間、半年でかせがなくてはならないきびしさがわかりました。

中でも酪農家にとってもっともきびしい仕事は牧草の乾草上げでした。この作業は少しの雨でも降れば中止、晴天が訪れば夜、夜中まで続行という1日問題の仕事です。

この牧場は小さいながら、よく見学者が来ました。何故……昭和48年1月にカナダから輸入した乳牛、スターローンが2回搾乳で乳脂量547キログラムの日本新記録を更新したからです。これには辰美さんの与える濃厚飼料に功績があると、僕はしっぱいし、おこられながらもその餌の配合をおぼえ給与しました。

また、ほかに、この牛の搾乳を受けもっているおくさん、これは僕に出来るかどうか……牛には人の愛情が必要です。搾乳時に男女、どちらかという、なぜか女の人の方がいたわると気持ちが通じてか、よく乳を出します。こういうふうに搾る人によって牛の気持ちが変わり、乳量に違いが生まれるということがわかります。

毎年、秋に入るとサイレージ作りがはじまります。

この牧場では、9月に入ると、カラになったタワーサイロのそうじと完全密閉のため、石灰水を内側にぬります。

100tが2、200tのが1のタワーサイロ、1週間近くかかる3のタワーをまんたんにするには共同作業が行なわれます。年に1度しか使わない高い機械なので各牧場、協力合せて機具を買い、順番にサイロをつめるのです。

實習中、乳牛、肉牛共進会につれて行ってもらいました。各地方の共進会にもいく度が行ったので牛、豚のが出来るようになりました。

皆様のおかげで北海道へ實習に行けたことをふかくかんしゃします。また、きびしい作業の外に北のほてに近い秋の網走を1週出来たことは一生思い出となるでしょう。

この1年半をふり返ると畜産の色々なことを知り、多くの友も得て、私の青春の良き思い出

になることでしょう。

短い文章ですが学んだことは書いたつもりです。
あとは成功するか失敗するかは私の腕にあると思います。

最後になりましたが私の研修のため色々ご指導
下さいました事業団の皆様や試験場の先生方に心
からお礼申し上げます。

以 上

「応募の動機」

ブラジル国・モンタ・カタリーナ州・ラーモス移住地
鈴木 等



私はブラジルにきて13年になります。現在父と一緒に農業をやっています。そして5年前に15ヘクタールばかりの土地を買って桃、リンゴ、スモモなどの果樹園を始め一生懸命に手入れをし、今ここに私達の第2の故郷をきずくべく頑張っています。そして果樹も今年で5年生になり、りんごのばあいは良い実をつけましたがまだまだじゅうぶんとはいえません。問題てんがたくさんありますが、このかいけつには今日本から当カンタカタリーナにリンゴの実地しどうにこられている後沢先生が大へんほねをおっていただいととも勉強になります。又最近1つの問題がかいけつしましたが、まだ私にはなっとくがかいかない事が2、3ありますので、ひとつこれを自分なりに勉強したいと思っていたやさき日本に研修にいかないとゆう話があり、父と相談のすえこれをきかに行つて勉強して来いと言うので私は嫁んで行く事にきめました。又これからも色々な問題にぶつかると思いますが、その時のよびちしきを勉強するべく努力しようと思っています。後沢先生もかざられた期間ですのでいつまでもたよっている事が出来ません。自分達の事は自分達でかいけつしなければなりません。又、今桃、スモモの病気で問題になっているモリニヤ、サントモナスなど色々わからない事がたくさんあります。冬眠だけの問題等色々あります。今まで果樹がこんなにむづかしいと思っていませんでしたが、自分が作って始めてむづかしさがわかります。ほりさげればほりさげるほどむづかしくなっていますが、1本の本を育てるにしても大きければ大きいなり、小さければ小さいなりに楽しい夢があります。一生懸命育てた果樹がやがて花が咲き実がなり、そして市場に出て行くとそうぞうただけでも楽しくなります。とくに後沢先生の実地しどうはしんけんそのもの。のこさばきは実に名人芸の感があります。あまりすきでなか

った農業にきょうみがわいてきました。これから新しい知識を学び次々に立向うであろう問題に体全体でぶつかって行こうと思っています。文化のおくれているブラジルも最近はおどろくほどのはってんぶりを見せています。おくれずあわてず、私は私の道を一步一步歩んで行こうという気持ちでいっぱいです。

「1年半の研修で私が得た事」

1975年4月2日ブラジルを立って、日本では海外移住センターで約5日間、日本の現状について研修を受けました。

私はリンゴについて技術研修を受けました。長野県の果樹試験場で果樹部の竹前先生について学びました。

月日の経つのは早いもので、研修を始めて早や1年半になろうとしています。今1年半の研修を振り返って、辛かった時や楽しかった時がついきのうの事のように思い起こされます。

この研修は私の人生にとって、掛替えのない体験であり、良いきょうくんもつみました。日本で生れ、小さい時ブラジルに行き、ブラジルで育った私は、技術研修生として郷里日本の地でリンゴ作りの技術を学ぶ事が出来るとは夢にも思いませんでした。

果樹試験場へ入学してまずリンゴの剪定から始めたのですが、話しを聞いた後、いざ自分で剪定してみても、聞いたようにはきれず、木のまわりをくるくるとせんかいするばかりでした。その剪定もひと月、ふた月とたつうちどうやらまがりなりにも剪定が出来るようになり、接木を学びましたがこれもおなじく思うようにうまく接がらず又失敗をしたり自分の手を切ったりして散々でした。

4月も終りに近づいたある日曜日、寮生又先輩と共にあんずの花で春を祝って花見をしました。1年生と2年生の親睦会をやりお互いに自分の思っている事などを話し合いました。私もいくばく

かの酒を飲んでいりうちに多少酔いがまわってついついポルトガル語を話したりして自分で気がついて苦笑すると皆びっくりしたような顔で私を見ていましたがそのうちだんだんと打ち解けて話しているうちブラジルと言う国に興味をしめし始め、話しなどをするようになり又、テレビなどでブラジルのことが出るといような事をよく聞かれます。

又私自身、あまり話しじょうずでなく無口なほうなので始めは近づきにくいようにしていましたが、今では気がるに話しかけてくれるようになりました。

又中には兄のようにしたってきて、恋の悩み相談まででて、解決に苦しめられました。

又多少年齢の違いがあるにせよ、良き友達を得る事が出来、又お互い農業に生きてゆく者どおしの話し相手として、又日本とブラジルと国は、はなれていても良きライバルとして私自身のはげみにもなる事でしう。

私が日本研修中に気がついた事といえば、やはり工業国だけに便利な機械が多くありすぎて農家の人は年に1度か2度しかつかわなない機械を買いすぎ無駄な事をしているようで、みえも多少あるように思われました。

又食糧危機といわれる日本の国で農業後継者がいないとゆう事、これから農業をやらんとしている私にとって淋しい事でした。でも人件費の高い小さな田畑で真黒になって働きといってもわりなような気もしないでもありません。そんな中で当試験場の学生達はほとんどが農家の後継者で一生懸命勉強している姿を見ると私もなんだかこうしてはいられない気持ちになります。私の場合広い土地があるだけ夢と希望がもてる。又やりがいがあります。ただ今までは良き果樹に対しての指導者がいなかった事です。日本にきて技術を学びこの体験をいかして帰ってから日本の人達にまけない果樹作りになりたい。私は努力し日本で学んだ多くの先生、先輩、後輩にまけない果樹園をブラジルに作り、5年あるいは10年後又日本に帰って私の錦をかざりたいものです。

1年半私が学びとった事それは多くの人達との交流で話をし、多くの友をえて人と人の心のふれあい、人それぞれの生きかた、そして私の生きかた、進むべき道について1年半の研修で自信をつ

けられたような気がします。

私はブラジルに帰ってもだてに日本に米たのではなく、ああやっぱりあいつは日本に行ってきただけの事はあるなといわれるくらいの果樹園をきずきたいと思っています。又私の研修中にお世話になった人達のおかえしにしたいものです。妹や弟達の良兄で一家の後継者としてりっぱに父のあとをつぎ、皆さんにこたえたいとねがっております。この1年半ほんとうにありがとうございました。

「僕の学びたいもの」

パラグアイ国・アルトパラナ県・イグアス移住地
関 節 朗



僕はパラグアイ国で二世として生まれました。祖父の代に移住したのですから、もう40年になります。祖父お父母の話してくれる日本のことは古いものですが、それでもすばらしく感じられます。本が読めるようになってからは本によって日本の国の経済、社会、工業などの発展ぶりを想像して来ましたが、特に高速道路、東京タワーなど、世界に誇れる建物に魅力を感じます。

またパラグアイ国に輸入されてくる自動車、ラジオ、電気製品、その他あらゆる日本名の品物によその国の物に比べて良いとパラグアイ人にもひょうばんになっております。それに日本人はこの国では非常に信頼されておりますが、僕はそのうち何とかして日本へ勉強に行きたいと思っております。

僕が現在すんでいるイグアス移住地は入植13年を迎えましたが、ここでは雑作、蔬菜、牧畜、養蚕、油脂作物などあらゆる物が取り入れられております。

しかし雑作や蔬菜は天候不順や販売方法がうまくいかなかったりして、栽培者の苦勞が絶えません。養蚕はイセブサ工場が出来て桑の栽培や飼育方法などが指導され資材の購入や繭の販売などの心配がなくなってからは各移住地で盛んになってまいりました。最近では収入も安定し飼育者は桑の栽培、蚕室の整備等に資力をつぎこんでおります。

僕の勤めているパラグアイ農業総合試験場もいろいろな部門にわたって試験をおこなっておりますが、特に養蚕に力をそそぎ、飼育室、上簇室、催青室、その他たくさんの施設が出来ました。

そしてこの試験場でおこなわれるこれからの試験研究は桑の栽培法、品種改良、育種、病理、繭の検定等広い範囲に及ぶことと聞いておりますが、僕は将来、この試験場でこれらの機械、器具を使っていろいろの実験をするほか、蚕や桑の品種改

良、桑園管理、飼育、収穫などのすべてを手間のかからない能率の上がる方法すなわち、機械化養蚕法について研究をして、労力がかからず生産費を安くし安定した経営ができるようにしたいと思っております。

それによって日系人移住地の経営も発展する事と信じますしさらにパラグアイ人にも指導して将来このパラグアイ国を世界に誇れる養蚕国にしたいと考えております。それにはこのパラグアイ国で勉強をするだけでは十分でないので古くから世界一の養蚕国といわれている祖父の母国日本へ行って養蚕についてのすべての技術を科学的に学ぶことが最も必要であると思っております。そのほか日本のすぐれた科学や文化についても勉強したいと思っております。

「養蚕技術研修で感じたこと」

月日が立つのはほんとうに早いものです。昨年の4月2日に念願であった農業技術の勉強をする為、国際協力事業団の研修生として日本に第一歩を踏み出してから早くも1ケ年半が過ぎようとしている。

私の研修は養蚕です。この1ケ年半日本では最も養蚕が盛んな県のひとつである群馬県の養蚕試験場にて研修をして来ました。私が養蚕を選んだのは他の作物と異なり比較的天候に左右されず短期間で収穫出来、多回育が可能なパラグアイでは一つの産業として発展するであろうと思ったからです。確かにここ数年養蚕業は目を見はる様な発展をして来ましたが技術的には日本と比較するとまだまだ遅れており、大規模経営に必要な機械類はほとんどなく、又導入もされておられません。こうした現状の中で最近、飼育面、蚕品種、病虫害など色々な問題が出て来て、今後養蚕を経営的に経営するには、その国に適した蚕品種、飼育技術を見つける事だと思っております。この1ケ年半群馬県養蚕試験場の先生方から直ちに応用出来るたくさ

んの養蚕技術を詳しく御指導いただいてほんとうに幸運であったと思います。

私がこの1ケ年半蚕業試験場において学んだ事は、まず昨年の春蚕期を育蚕課で稚蚕共同飼育標準表に基づいた基礎的な飼育方法を、壮蚕は多段循環式自動飼育を実習し、初秋蚕期は蚕種課で種取り実習、夏秋蚕用蚕品種の性状調査、催青法、卵の保護法をおこない、晩秋蚕期は病虫害課で、農薬、ソラミダニ、糸状菌、顕微鏡による蚕のウイルス病の診断をおこなう。本年度は、春蚕期、初秋蚕期を蚕種課で原蚕飼育法、種取り実習、人工孵化法、卵の冷蔵、微粒子病の検査などをおこない、晩秋蚕期は病虫害課にて蚕の病気全般について実習をおこなう(パラフィン切片の作製、蛍光光体法、電気泳動による病気の診断)研修期間を通して多くの有意義な技術を習得できたがその中ですぐに役に立ちそうなものを述べてみることにします。

<蚕種及び蚕品種>

蚕品種について、養蚕も家畜の飼育や作物の栽培と同じように利用目的に最も適した素質をもった系統を用いてその形質を経済的に最高度に発揮させなければいけない。それにはまず良い蚕種を選んで飼育しなければならない。現在のパラグアイの養蚕業を見ると蚕は年間7~8回飼育されていますが、各蚕期に適した蚕品種は飼育されておりません。なぜ飼育されていないかと申しますと、パラグアイの養蚕業の歴史が浅いのでまだ蚕品種の育成がおこなわれていない。今後養蚕が経済行為の一つとして営まれる以上蚕品種の改良にあたっては、繭のもつ経済的価値の向上に重点をおかなければならない事は当然である。今後パラグアイ養蚕業を発展させるにはパラグアイに適した蚕品種育成を積極的におこなう必要がある。蚕品種育成には色々な方法があるが(原蚕種のないパラグアイで育成を始めるには)比較的簡単な方法として交雑種からのもとし交雑が考えられる。近親交配を数代続け優秀な系統だけを残し新しいものを作る方法である。

<蚕桑病虫害について>

蚕桑病虫害を考えた場合蚕桑の病虫害を惹起する原因を概括するとつぎのようになる。

1. 生物的原因(昆虫、糸状菌)

2. 濾過性病原体(ウイルス)
3. 無生物的原因(光線、湿、湿度)
4. 遺伝的原因などである。

このような種類の病気の中で蚕の集団遺作の原因となっているのが濾過性病原体である本病は特に初秋・晩秋に多く、葉質も低下し多回育で病原が蓄積されているのではないかと考えられる。防除としてはまず、徹底した消毒と病蚕の早期診断である事を試験場の先生方と実際に添食試験をおこないウイルスの恐しさを経験しました。

本病の診断法としては、ピロニンメチルグリン法、蛍光光体法がある。

ピロニンメチルグリン法、病蚕を解剖し中腸の一片を取りスライドグラスになすりつけ固定液をつけて固定し、軽く水洗いをしてピロニンメチルグリン染色液を滴下し、数分後カバグラスをかけて顕微鏡で観察する。

蛍光光体法、紫外線を当てると蛍光を放つ物質で抗原、抗体反応という特異性の高い反応を利用したもので、病原検出感度が良好で病徴を示さない感染2日目頃の病蚕でも認知できる特徴がある。この方法は高価な蛍光顕微鏡と抗体液を必要とする為利用は限られるが、簡単なピロニンメチルグリン法があるので帰国後最も早く役に立つのではないかと思います。

まとめ

1ケ年半の研修を振り返って見て、養蚕技術の勉強はもちろんですが、いろいろな面で知識を広める事ができ、多くの友も得て、私にとって一生忘れることが出来ない。青春の良き思い出として心に残ると思います。この研修期間に修得した技術を理論だけに終らず最大に活用しパラグアイ養蚕発展の為に努力するつもりです。いろいろと条件の異なるパラグアイですぐに効果が出るとは思いませんが長い目で見れば成果が上ると信じております。

最後になりましたが研修期間中詳しく御指導して下さいました蚕業試験場の諸先生方に心より御礼申し上げます。又この様な機会を与えて下さった国際協力事業団の皆様方にも心より感謝を致します。

以上

「希望した目的」



家族は父、母、兄、夫婦、それに子供3人、弟2人（1人現在イグアス）に僕、現在10人の大家族。

男4人兄弟の次男に生れ昭和38年8月4日横浜港を出発し日本にさよならしたのが、……今から11年前12才の時でした。

南米とは暖い所だと教えられ、……またそう信じていたのに入植した翌日、（入植したのが1962年9月25日）は一面に真白な大雪なのはびっくり、さすがに子供心に不安な感じでした。なにしろ僕ら兄弟（兄貴をのぞく）の着ているのは半ズボンに半そでシャツと夏物で、持って来た衣類まで全部が夏物で着るのがないとおやじをうらんだようです。それでも寒いのは朝・夕で昼中は暑いくらいなのでホッと安心したようです。忘れない入植記念日です。

学校もスペイン語小学校に12才で入学、日本で6年生の1学期まで行ったのにまた1年生に入らなければいけないかと、学校に行ったら2年生に入れてくれる。

毎日農作業を半日手伝ながら6kmの道を通い小学校を卒業、進学を希望したが経済的に余裕がなく断念、その年は不幸続きで山を切ったが雨が多く不焼を作り、収穫時期まで続き大豆にも大きな影響を与え、生活状態が苦しくなった事が原因だったようです。

兄弟力を合せてがんばらなければと兄貴、弟に僕、自分達で15町歩山を切り、カボエラを整理し大豆、棉を植付しその年は天候にも、めぐまれ予想以上の収量があった時はうれしかった。

その当時から除草、植付、収穫は人夫を相手にやって来たが人夫賃がばかにならず、又、思うようにも使えず営農も広げられない状態でしたが、そのころより機械化を目標にがんばって来たようです。

69年に事業団の融資を受けて45馬力のトラ

パラグアイ国・アルトパラナ移住地 工藤 則 吉

クトールを買入しこれが機械化の第一歩かとうれしかった、でも現実には厳しく、買入したは、木の根が多く思うように使えず、こわす事も多く、溶接、旋盤とエンガルナンオン市まで行かなければ、できなく不便でした。

ブルドーザーが抜根作業を始めたので初年度40ha翌年25haの畑を抜根してもらい、これで少しだけ基礎ができ機械化の一段階まであと一歩かと思うとファイトがわき仕事の能率が上がるようです。

そのころサンパウロの講習会に参加して見ないかと言われこれは良い機会だと、喜んで参加希望し、ブラジルの大型農業の視察を兼ね講習会に参加、講習期間は1週間で、内容はブラジル農業を対照としての講義だったので、ここパ国ですぐ応用する事は資金面から少しなりですが、近い将来おおいに役だつ事と思います。ブラジルの農業特に短期作農業は、完全機械化、移住地の農業とはクダ違いですが目標にしてがんばって行きたい。

現在発展段階にあるコロニアの現状は、農産物の価格は厳しく安価で、反対に人夫賃は高く物価は勿論の事、燃料、農薬、農業機械は高額で深刻な問題であるようです。特に農業機械は高くても、人夫賃高、人夫不足から営農を広げて行くには絶対に必要になって来たわけです。現実にコロニアの70-80%の農家がトラクトールを持ち整地、プランタ、収穫などに活用し、少しでも人夫を減らして機械の力で営農を広げ、大なり、小なり機械化を目標にしている現状です、機械に伴い部品も高くちょっとこわすと何千Gsとかかり修理代もたいへんです。例を上げて見ればトラクトールがこわれ修理し直ったと思うと作業機がこわれると言った状態で、それでも小さな物で酸素溶接で直る物は山田鉄鋼所でやってもらえるが、鋼鉄でできた物は（トラクトールは全部鋼鉄）エンガルナンオン市まで行き、電機溶接をやった旋盤で仕上なければいけない、いそがしい時、それだけにやって来るのはたいへんです。そんな時コロニア

に1軒旋盤屋があれば便利だったすかるだろうと思うんです。

この言った理由で研修を希望し旋盤技術、電機溶接技術を学び少しでも早く修理し、また、自分で直して行きたいものです。

コロンビアの農業も機械化に変る段階に来ているようですが、生産資材の高額、農産物の変動は激しく、さらに営農技術の欠陥と言った問題が色々ありますが、これらの問題は農業関係者が一丸となって考え解決して発展して行きたいと思います。

「日本での技術研修を終えて」

4、5ヶ月前までは早く終って帰りたいような気持ちでしたが研修終了の通知が来た時はもう終わりか、…まだ2、3ヶ月続けたいような複雑な気持ちでした。

私が子弟研修生に決まった時移住地発展のため、また自分のために1年6ヶ月の研修期間をせいっぱい頑張って来るんだと心に誓い昨年の4月まだ肌寒い春の始めに羽田に到着し、14年ぶりに日本の土を踏みさあこれから1年6ヶ月の研修の始まりか、ずいぶん長い期間だなあと感じたものでした。

最初の1年間は盛岡職業訓練校にお世話になりました訓練生300名(男、女)女子3科、男子6科、計9科に別れていました、私は機械科39名の皆さんと毎日学科、実技の訓練を受けました。最初の2ヶ月ぐらいいは1日中学科、机に座りっぱなし、おまけにねむくなって来る事もあったが実技の時間が多くなってから毎日が楽しくどんどん学べた気がします学科でわからなかった事も実技でこれはこうだったと学科の事が思い出されるのです。

工作機械で1番大事な事は削り速度 $V = \frac{\pi DN}{1000}$

$N = \frac{1000 V}{\pi D}$ と言った公式を覚えて計算する事です。

旋盤1台で随分多くの仕事ができるものです、丸削り、中ぐり、テーパ削り、ねじ切り、曲面削りまだまだ多くの事ができる事を教えられました、この旋盤作業に大事な事がもう一つバイトの角度、すくい角をどのようにとると良く切れるか

?…ドリルも同じですが、にげ角を正しくつけると良く切れる、これが基本です次に図面を見ながら寸法どうり削る、 $\pm 0.1 \sim \pm 0.01$ までの寸法を旋盤で出さなければいけない最初は $\frac{1}{10}$ どころか1mmも2mmも削りすぎたりしっぱいもありましたが最初の修了試験で学科、実技では2級と同じ課題をやってどっちも一番で修了できた事が大変うれしかった。

こうして1年間訓練校で学び3月15日～9月30日まで鈴木機械製作所にお世話になり訓練校で教えられた基本を生かして頑張りました。

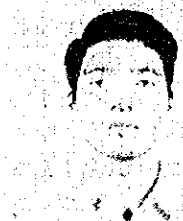
鈴木機械製作所は農機具部品を作っている小さな会社ですが仕事はいそがしく月に20～40時間の残業があります、私が入って次の日から夜12時までやらされた時はいささかびっくり、昨年ごろから鉄工業の不況で小企業は倒産している会社が続出している最近ですが私の所の会社はその心配がないくらい忙しい毎日です、8月の末には1台2000万円もするNCフライス(自動フライス盤)を買入れ、岩手県で始めて東北にも3台しかないと言う機械を入れて小さくても立派な仕事をやり目標は県下一の製作所になるんだと親父さん(社長)始め社員全員が一丸となって仕事に取り組んでいる。こんな会社で私は研修できた事はバグァイに帰ってからの大きな心の支えになります、又最高の教訓でした。

こうしてあっと言う間に過ぎ去った1年6ヶ月の研修でしたがバグァイに帰って自分の研修成果が少しでも移住地の皆さんのために役だてるように努力して行きたいと思っています。

最後に国際協力事業団の方々職業訓練校の先生方、鈴木機械の皆さんこうした機会を与えて下さって、又親見になって教えいただき心から御礼申し上げます。

「研修の動機」

パラグアイ国・アマンバイ県・ペドロファン・カバリェロ市
下 元 敬



僕は幼い時から勉強が嫌いであつたが、動物を飼育したり、一時的に飼っていた牛の分娩を手伝ったりして次第に動物に対する愛着が強くなって来たのを覚えている。ところがフラム移住地より当地に移転した12才の頃あまり好きでもない学校へ両親に勧められて、いやいや通学している内に少しは勉強も面白くなって来たのは確かであるが、これといって将来への目的がはっきりしていた訳ではなく単に惰性で通学していたといつてもよい。

その後16才の頃家庭の都合で市内に下宿する事になった。その間3ヶ月に一度ぐらいはペドロファン、カバリェロの市から50kmの地点にある農場に帰っていた。その帰り道にサン、ルイスと言うパラグアイの大牧場の中を通るが、その景色が正に絵に書いたような美しさでとりわけこもりと小高い山のほとりで一休みして、遠くにむらがる牛を眺めると何か心が洗れるようなすがすがしい気持ちになり、3年半の短い期間であつたが、この道を通う毎に牧畜に対する興味とあこがれを胸に抱くようになった。

僕の住むアマンバイはブラジルの国境にあり、気候風土、その他牧畜には最適の条件をそなえており丁度日本の僕の郷里四国の気温に似ており、又隣接のブラジルではかなりすばらしい成果をあげている。

世界的に動物性蛋白が不足している現状から見て牧畜業は非常に安定した永年作物と見る事ができ、専門家や篤農家の意見を聞いても異口同音に将来性を説かれる。

それに牧畜は耕作物とちがって、植付や収穫時に天候に支配される事なく一度設備すれば何十年でも続ける事が出来る利点があり、人手もあまり必要でなく規模に応じてやれる事も解った。

だが牧畜を始めるには沢山の資金が必要だし、そこで僕はこの資金をつくる為に如何にすべきか

を真剣に考えた。

それには不得手なスペイン語学校を退学し、父の手伝いをして現在の仕事(製材)を伸ばすのが最短距離と考え両親に相談した。

5年ぐらい手伝をし、事業を軌道にのせた後に2、3年程畜産の勉強をさせてほしいとお願いした。

然し両親は僕の学校退学についての意見に反対した。特に父は僕の申し出に非常なショックを受けたようであつた。然し僕の強い希望により父もやっと納得し、「お前がこれ以上学校に行っても駄目と言うのなら学校にやっても仕方があるまい、お前の信念がどれだけ固いかためして見よ」という回答を得た。

その当時我が家は経済的に余裕がなく牧畜を始めるところか生活がやうとの大変な時代であつた。例えば学校に通う中古自転車さえ思う様に買えない実情であつた。以来約束通り5年の今日迄牧畜を夢見つつ父の製材所を軌道に乗せるべく日夜うちこんで来た。お蔭で経済的にもゆとりができ、今年将来の牧場用に500町歩の土地を購入出来るまでに至った。今自分に残された事はただ一つ、畜産の技術を身につける事だけである。パラグアイ、ブラジルの畜産も多少とも研究しているが、然し日本のすぐれた技術を身につけて来れば小面積でもっと収益のあがる牧場経営が出来る事と確信している。

又進んだ日本の若い人達と接触し交際する事によって世界観、人生観も広げられるであろうし、日本の良い所を学び取って来る事は僕の今後の人生に意義あるものと確信し、さらにこれを基礎として、ささやかながらパラグアイの農畜産の発展に役立てばと思っています。

「1カ年半を振り返る」

希望と不安を胸にいだき乍らも、無事研修も終り、何かしらホッとした感じた。しかしホッとす

る一方で早くも帰国後のことが頭の中で交錯している。そんな心境である。

研修先であった群馬県畜産試験場での酪農経営実習、これが私の研修課題であった。

今一年半を振り返ってみて、本当にバラダライで通用するような技術を身につけたかどうか疑問である。ただ一つはっきりしていることは、一年半直接牛に接しながらの毎日であったということである。(何時も大家畜経営ということが頭の中にあった毎日であった)、肉牛乳牛の飼養管理、分娩前後の注意事項、交配(種付け)、品種改良など繁殖に必用とする技術的なことを主体に学んだ。

その他、いい牛と悪い牛の見わけかた、病牛の早期発見、放牧管理と放牧衛生、草地造成、草の調整と理論等の講義と家畜人工授精師に必要な繁殖技術の講義と畜産を行なう上に必要な土壌と肥料など私の研修課題にもっとも役に立ちそうに思える。

少し自分の研修方法を反省してみたいと思う。

私の研修はなんだか搾乳で始まり、搾乳で終わったような気がする……だが、この時間は私にとって一番いい勉強になったと思う。(休で直接牛に接し、牛と言う動物を体で知ることができた)

又試験場での実習では、何人かの獣医師や技師さんと一緒に仕事が出来、何かとわからないことはその場で説明を受ける事が私の研修成果をあげることが出来たと思う。週一度の講義、月一度の農家見学研修や農家実習では日本の農業を知ることが出来た。

日本の酪農では歴史が深いと言われている北海道での酪農実習、又短い期間ながらも養豚研修は大変興味を持つことが出来、色々いい勉強にもなった。

最後の仕上げと言えませんが、事務所での研修は、私が実際したこととはあまりためにはならないが、課長から現場職員への接し方、また獣医師や技師へ、そして試験場に関係する人々、獣医師や技師の試験場内での役目、試験成果、これらを目の当りに見てきた。こうしたことも私の研修中のいい経験になったと思う。

<北海道での実習について>

6月2日から9月29日の3ヶ月間、小 和さ

んの牧場で実習を受けられた訳ですが、牧場は苫小牧から車で30分ぐらい行っただ。早来と言う所にある。

小 和さんは、昭和5年に約30名の同志と白き地女地に入植し、昭和40年にはH N K北海道地区優秀農家として賞を受けたとまで言われる。

あの大牛舎、そして空をつくサイロ、緑なす牧草地に放たれるホルスタインの牛群をみて素晴らしい景観に感嘆の声をあげた。だが一面足もとの土を掘ってみると、その土がなんと、これでも作物が育つのかと疑うほどの荒い樽前系火山灰地である事に驚いた。こんな環境の中で育った、小和さんは、小学校卒業後全く農業教育もうける事が出来ず農業一筋にいそしんでいる。

土地は昨年20町買ひ、現在は125町(牧草地80町、デントコン土地45町)もあるそうだ。牛も総合頭数は74頭(搾乳牛25頭、乾乳牛や育成牛35頭と肥育牛15頭)で牛種を特に改良する積りがなく、むしろ多頭化に力を入れている、又牧草用機械に力を入れた経営をしている。

家族は、円満でおじいさん、おばあさん、おくさんと娘3人の計6人家族で毎年2人の実習生を雇っているそうだ。

ところで、農事に関しては、もちろん私も小和さんの指導を受けながら機械を使って作業をした訳ですが、土地を耕し牧草やデントコンをまいたり、又牧草を刈り乾牧草やデントコンのサイレーンを作ったりした。そして時には牧草地に生えている「ギンギン」と言う雑草を1本1本シャベルで掘り起したりもした。こんな仕事にも機械の点検とか整備など、そして放牧強度や草地管理に関する事など学ぶ事が出来た。

その一つとしては、牧草地の6ヶ所を選び、1 m^2 の中に植生している牧草、雑草をより分け、草種毎に草丈と草量を調査し、6ヶ所の平均を出します。この1 m^2 の重量を1万倍すると1haの草生量が算出され、それによって牛の頭数と採食日数がおかるのだ。

又放牧乳牛が採食する草の量は草地および放牧乳牛の状態によって異なるが、1時間当たりの採食量はよい草地では8.5kg、不良放牧地では4kgぐらいだそうだ。

又は、発情の見わけかたとか、種付時期とその

受胎率に関する事。

受胎から分娩までの日定の出しかたとか分娩における注意。

病気の早期発見法と応急手当のしかた。

仮死時の人工呼吸を行う方法など大変勉強になった。

日本とバラクアイではあまりにも環境の差があるため経営には直接つなぐ事はできませんが、私達達のこれからの生活に参考にしたい。

最後に大変お世話になった試験場の方々、そしてまたとないであろうこうした機会を与えて下さった事業団の皆様に心より御礼申し上げます。

帰国後、移住地発展のためなどとはいかないかもしれませんが、この1年半の研修は私のこれからの生活に大変役立つ事と思います。

終り

「私の学びたいもの」

アルゼンチン国・ミシオネス州・ガルアベ移住地

水 野 悦 郎



どこまでも背く、はてしない大空と新鮮な空気を胸いっぱいすって、汗を流して力いっぱい働く農業を10数年間営んできて、今さらながら農業は精神的又健康のためにも良い職業は他にないとしみじみ感じている。しかし農業と簡単に言っても知れば知るほど病原菌悪性ウイルスとか土壌中の微生物ネマトードなど色々な難しい専門的な問題が次々と出てきて、農業経営の奥ゆきの深い難しさが分ってくる。そこで、ただもくもくと働くだけでなく、もっと新しい近代的な農業を勉強したいと思っていたやさき事業団で日本での農業研修生を募集していると言うので、こういう機会に、ぜひでも参加して柑橘蔬菜の経営方法、それから10数年間積み積った農業の疑問を積極的に解決したい。このアルゼンチンにも農業経営を勉強する専門学校とか農業研究機関インタなどあるが、全国的に平坦な土地で大面積の農地を営んでいる人が多いためか、ミシオネス州奥地の起伏のはげしい狭い農地では、スケールがちがいすぎて、あてはまらないことが少なくない。その点狭い面積でも集中的に手入れをして、一単位あたりの増収を狙う日本の営農とは共通点が多い、雨量の点でもミシオネス州は年間2,500mmから3,000mmとアルゼンチンの中でも非常に多い。特に柑橘と蔬菜は日本でも相当昔から栽培されているので、あらゆる病気と、その手入れの方法も研究されてきているだろう。日本の柑橘の生産地では100年以上もの老木が今だに実をならせているという、それほど樹木を長持ちできるのは、日本の気候が温暖ということだけでなく、世界の水準を抜く高度な農業技術があるからだと思わずにはいられない。蔬菜については、トマトの温室栽培の管理方法を主に学びたいと思う。今から6年ほど前、物価に対して葉タバコの値の安い時があり、タバコの収入だけでは経営が成立たなくなった。入植者のほとんどは短期作ではタ

バコ栽培一本だけだったために、このころからボサダスの野菜作りとかブエノスアイレスの花井栽培洗滌店などへ移転して行く人たちがふえた。10人ほどいた僕の学友も全部出て行って、とうとう僕一人になってしまったのは残念だ。

僕たち家族は相談の結果なにがなんでも、ここに残って、この畑を完成させなければ、アルゼンチンまで移住して来た甲斐がないということに意見が一致して、この不況の乗り切るため春の高価な時期に出荷できる冬作トマトの栽培を始めた。ところが3年間は例年よりも寒く出荷直前のトマトは、一晩中回りで雑木の山を燃したにもかかわらず、3回とも霜のために枯れてしまった。そこでもうこんな失敗を繰返さないように、技術的に難しいためか現地人では、だれも作っていない。今まで例のない温室栽培に切り替えることにして、10カ月間ブエノスアイレス近郊の花井栽培者の所で仕事をしながら温室を建てる技術を実習してミシオネスへ帰り1棟の温室を建ててトマトを作ってみた。ところが霜は室内で炭を燃して防ぐことができ、露地栽培よりも比較的良好な成績を上げることができたが、冬の少ない日射時間、日中の高温と多湿のためか、主下の4段ほどは実がほとんどつかないという問題が残った。冬は温室の回りに雪が積っている中で、冬から夏まで一年中温室野菜ができていたという日本では、こういう問題をどう処理しているのか大変興味深いことである。これからの農業経営では、なるべく労働者の使用を少なくして機械化農業に替えていかなければ、将来伸びていかなと言われていたのは、世界的な傾向だが、このアルゼンチンでも、その例に漏れず、コロニアでも小形トラクターからチェーンソー、耕運機、ミスト機など各戸経営方式に応じて相当な台数が入っているが、困ることには故障してもすぐ近くには修理工場もなく、電話もないので農繁期など、ちょっとした故障でも作業ができなくて途方に暮れることがしばしばあるので、浅く広く農業機械の簡単な修理と正しい扱い

方などを学びたいと思う。最近では有望な柑橘の新品種ナタール、バレンシア、レモンタイチなどがブラジルから輸入されたので、近い将来きっとここも豊かなコロニア変っていくことだろう。今度の日本での研修もコロニアの将来の発展のために積極的に役立てたいと思う。

「日本での技術研修を終えて」

今思い出すと研修期間中でこの1年半が一番長く感じたのは日本へ来てから3カ月くらいの時だった。

1回目の夏が過ぎる頃になるとやっと日本の生活にも慣れてきた。

そして後数日で日本での研修も終るといふ今になってみるとこの1年半がなんと早く過ぎてしまったことかと感じるから不思議だ。

柑橘栽培の勉強だけでなく、日本へ研修に来たからの1年半ほど多くの事を学んだことは今までにはなかった。

12歳の時に両親に連れられてアルゼンチンへ移住してから25歳までの青春時代を家族以外の人とは何日も会わないような生活をしてきた私にとってこの研修期間中に毎日多くの人に会い何も知らない自分を発見して戸惑う事もしばしばあった。

そんな自分を知ったのも一つの大きな収穫だった。

日本のミカン園を見学して

初めて日本のミカン園を見ておどろいたのは多くの農家の畑が20°もの急傾斜地だったことだ。アルゼンチンに居る時に話には聞いていたが想像以上だった。農道はアスファルトなどで完備はしているものの収穫したミカンは背負や天秤で運び出さなければいけない所がまだ多いようだ。

気象によって柑橘の良く出来る所は限られているせいもあるが、こういう所を見ると日本は本当に狭い国だと感じる。しかしその狭い傾斜地という環境に応じて小型で性能の良い農業機械が普及されていて畑の手入れは驚くほど良く行き届いている。

＜ウイルス病の防除対策について＞

何年もかけて育てたミカンがウイルス病でだめ

になってしまったあの苦い経験は2度と繰り返さない為にもこの1年は特にウイルス病の事を中心に調べてみた。日本では温州ミカンがウイルスに抵抗性である為に昔からウイルスの事は気にされていなかった所以で専門書が少なく研究は思ったより遅れていた。しかしウイルスの事は何も知らない私は試験場の先生に基礎的な事から教えていただいてミカン栽培に必要なウイルスの知識を学ぶ事ができた。

アルゼンチンで実際にミカンを栽培するに当たって今のところ一番問題になるのはトリステサウイルスとエクソコーティスウイルスだが、この病気は幼苗に感染しても3～4年は外観的な著しい異常はほとんど見られず生育も旺盛だが、いよいよ果実がなりだすと病徴が現れ始め、それから1～2年で急激に悪化して落葉、生育阻害、小果などの症状が現れてくる。私達柑橘生産者にとってウイルス病は最も重大な問題だ。

現在私達のコロニアに発生しているトリステサウイルスには弱毒系利用と抵抗性品種利用の2つの実用的な防除方法がある。

弱毒系利用とは比較的生育に影響の少ない弱いウイルスを前もって感染させておいた苗には同質の強毒系ウイルスは感染しないというウイルス間の干渉効果を利用した防除方法だ。これはすでに日本でもハッサク系55で実用化している。

抵抗性品種を利用した防除方法とはトリステサに抵抗性品種の台木と穂木を使用することによって急激な病徴の悪化を防ぐ方法です。

その他エクソコーティスウイルスは汁液伝染のみだからカセイソーダ3%ホルマリン3%の等量液で剪定バサミなどの器具を消毒することによって無毒を保持できます。

果樹栽培は収入の上るまでに約10年もかかり、その間に又他の強毒ウイルスが入ってくる恐れもあります。そこでこれからの計画はミカンの他に2種類くらいの永年作物をとり入れた複合経営をしようと思います。

これから日本で学んだ事を活用してあのコロニアを将来豊かな村に変えていく為に精一杯努力する事がこれからの私の使命だ。

それが又僅かながらアルゼンチンの発展又世界の発展にもつながる事を信じて。

この1年半の間何も知らない私に色々と教えて
くれ親身になって相談に乗って下さった研修先の
先生方々、事業団の方々に深くお礼を申し上げます。

「私の学びたい事」

アルゼンチン国・ブエノス・アイレス州・ウルキッサ移住地
西 田 孝



僕は今、兄と一緒にカーネーションを作っています。兄と一緒に仕事を始めたのは1972年の1月からです。その当時は3つ上の兄が一緒だったし、僕は花の事についてはまだなにも知らなかったのを見習いから始めました。

この2年半で色々な事を覚え、今では仕事の一通りができるようになりました。けど覚えなくてはならない事がまだまだ沢山あります。一通りできると言ってもまだほんの上程度ですからこれでよしと言うまでは何年先かわかりません。

今、家で花を切っている温室は、ガラス温室で7本、ビニール温室4本です。新しい苗が植っている温室が4本、後4本今年中に苗を植えてビニールをかぶせる計画です。去年までは温室の数が少ないため苗の植え代え時期が来ると仕事がものすごくかさなって土の手入れがあまりできませんでした。同じ所に植える場合一時でいいから雨に当たり土の消毒をして土を休ませた方がいいそうです。それを期座にしていたから毎年作がちがっていました。

今年からはそれをなくすため温室もふやし、あまり手のかからない自動灌水も取り付け、花の方に力を入れ、昨年の事がないようにして良い花を作る工夫をしています。しかし、花を咲かせる前に初めの苗が良くなってはなりません。細い貧弱な苗から、良い花を咲かせると言ったらそれこそ大変です。

今まで植えて来た苗は、ほとんど兄達の手で作られていました。設備が整えられてないため、たまたま失敗した時がありました。我家だけでなく、どの家も同じ悩みをもっているにちがひありません。さした芽を100%つかせるのはそうとうの研究が必要だと思います。自分でさして、ぜんぜんつかなかったと言う事はないけれど、半分、あるいは、全部でなければ細い……。今年はいいのができた。来年はわからない……。

苗のできばえが一定していなくてはその年と次の年の作が違って来ます。

最近、苗を専門に作っている所から買って植えている人が増えて来ました。しかしいくら専門といっても神様ではないから自然には勝てません。今年みたいに寒さがひどかったら、寒さのため、根が出るのが遅くて予定日までにはあわず植付けが遅れた家も少なくありません。

そんなわけで、僕が日本へ行ってまず初めに覚えたいのはカーネーションの育苗です。さきほど専門でも自然に勝てないと述べましたが研究をかさねて行く内に自然にもたちうちできるようになると思います。

何によりも先に完全な苗を作れるようになり、いつ作っても一定したできばえを得るようにしたいと思っています。

苗の育て方だけでなく、親木からの選び方でもだいぶ変わってくると思います。種類により、花の素質も違ってくると思います。花が深山咲く種類もあれば、あまり咲かないけど木が大きくてかたい。述べればまだ色々あります。古い木からとった苗は少しむりをするとうすぐ弱ってしまったり、木が細くなったりしますから、なるべく新しい木から取り、作を一定した方がよいと思います。

苗ができたら今度は、その苗から花を咲かせなくてははいけません。この点でも習う事はいっぱいあると思います。苗を植えてから、少なくとも3ヶ月はかかります。その間の水かけ、消毒、いっぱいあります。これも、くわしく習い、できるかぎりの力をつくじたいと思っています。

日本で研修を終り、アルゼンチンへ帰って来たら覚えた事を十分いかし、最初の作は、兄と一緒にやろうと思っています。

その後、覚えたばかりの良い方法があれば、そんなのを組み合わせ、研究しながら自分のため、みんなのためにやくだてたいと思っています。

日本とアルゼンチンとの設備はだいぶ違うから、その点で少々なやむかもかもしれませんが、それは

それで研究のたねになり、頭をひねった後、それ以上の物ができるかもしれません。設備だけでなく、土地や気候も違うと思うけど、そこをどうこなすか、僕のうでほしいでしょう。

日本へ行くのは僕だけでなく、毎年2名だそうですから、同じ花作りを勉強して来た人達と相談し合い。みんなの協力を共にして行けば、アルゼンチンの花は、少しずつ良くなって行き、ずっと、ずっと咲き続くことと思います。

「研修を終えて」

1年半、長い様でとても短い期間だった。去年の4月2日に羽田に着いてその夜から3日間横浜の海外移住センターで研修を受け、長崎の研修地へ向った。東京から長崎まで10時間、その間に見える景色、あらゆる物がアルゼンチンとは全く違う物ばかりであった。雑誌や新聞で読んで知ってはいたが、スモックが多いのにビックリした。まず東京、静岡、大阪、神戸、汽車が止まる駅のはとんどの空が曇っていないのかさすんでいる。こればかりは、余り良い気持でなかった。

長崎では県の農業大学の寮にはいり、そこから県の農業試験場に通った。試験場ではカーネーションが60坪、菊、つつじが60坪ずつ、そのほか露地栽培の菊、つつじが少し、この中で10ヶ月間研修を受けた。試験場ではカーネーションだけとはいかない。実際、つつじ、菊の作業が多かった。

しかし、物知らずの僕にはかえって、良かったのかもしれない。最初からむずかしいカーネーションの問題など出されたとまどうばかりで、その内いやになっていたかもしれない。余るほどの時間を与えられ、日本の環境になれ、マイペースで習得した。幾分のんびりした行動だったが、せっかく詰込んで右から左へ素通りだと、なんのためにもならないから、僕に合ったスピードで行くのが良いと思い、マイペースで行った。

今年2月からは実地研修として香川県の香花園と言う所で働いた。真鍋氏を組合長に香花園農業組合法人として事業を大きくやっていて、設備も、ととのえ、アルゼンチンではとてもまね出来ない様な大設備である。試験場と違って、朝から晩ま

でカーネーションと向い会い、「母の日」前後の一週間や最盛期時には、夜11時を過ぎる日はめずらしくなかった。この組合では育苗部分から出荷部まであり、僕にとって最高の研修地でした。アルゼンチンと日本では気候も環境も違うので、そっくりそのまま日本での作り方を持ち帰る事は出来ないだろうけれども色々な面で応用出来る事は沢山あると思っています。僕の一番願っていた育苗法、アルゼンチンでは思う様に出来なかった苗が出来る様な気がしてきました。茎頂培養と言う最新法式の技術も学ぶ事が出来ました。それでもアルゼンチンに帰って作り始めたら色々な面で難点が出て来ると思う。しかし、それをのりきってこそ、立派なカーネーションが出来るのであり、帰ってからは、僕のうでほしい、努力次第でしょう。

この1年半、僕にとって、色々な面から見てもマイナスにはならなかったと思う。夢見ていた日本で研修出来、本当に良かったと思っています。日本のどこへ行っても暖く迎えてもらい、みなさんに返えず御礼の言葉もございません。

この日本での1年半、おすれられない良き思い出になる事でしょう。支部の皆さんにも、迷惑かけた事もしばしばありました。

皆さんの御恩を汚さない様、今後とも頑張ろうと思っています。1年半、本当にお世話になりました。

「私の学びたいこと」

ボリビア国・サンタクルース州・サンファン移住地
牧 尾 孝 司



アンデスのふもとになるコロニア、それがわれらの第2の故郷、サンファン移住地である。19年の歴史を経て、入植生活にも、どうにかとけこみ営農への見通し、基盤も固り、開け行く明日への希望に満ちあふれた今日このごろであるが、まだまだ生活が楽なわけではない。経済的にも余りに苦しい。これからの移住地を背負って行く、われわれ若者がこれらの問題について無感心ではならない。われわれがやるべき事は、これから営農が進むにつれ、また事業が大きくなるにつれてかならず必要とする技術を身につけておく事ではなかろうか。

これらに対する指導者の少ない現在のボリビア、今度の研修生応募にあたりこの機会に私の希望がかなえられるなら、サンファンいや、この広い南米のために次の事を中心に学びたいと思います。

私が日本で学びたい事は、大家畜、主に牛です。現在ボリビアでも肉が不足しています。広大な土地をあいては肉不足とは不思議な事ですが、いかに能率が悪く、またそこにどれだけの技術が不足しているかが、窺えられます。肉不足の大きな理由は土地が広いとは言え、一つには、牧草にあると思います。隣国のブラジル及び、アルゼンチンでも近年盛んになりつつある。濃コウ飼料による肥育も考えなければ、現在の1ha当り2、3頭と言う効率の悪い牧畜では、とうてい解決出来ないと思います。

また必要な事は、品種改良です。いかに、かず多くよい家畜を育てるかが問題です。とくに問題にしたい事は、市場の、また運搬の不便なこの国でどのようにしてこれらの畜産物を加工できるか、と言う事です。

ボリビアに於ける牛の病気はまだまだ先進国にくらべると種類も少ないのですが、これからは、増加する事は必至であり、その対策も必要でしょう。従って、私が修得したい事は、大家畜、牛に

関する病気、牧草、肥育、品種改良、肉、乳加工、など全てです。

若し、私の応募がかなえられるとすれば、情熱の限りを注ぎ、特に当地、いや当国に於いて有能な技術者の進出が期待されている現状、高度に進んだ祖国日本の技術をこの目で、この耳で、この身体で体得し、その責務を全うし得る人間の一人として、ただひたすら精進することを吾と吾が心に言い聞かせている。そして実質共に備わった日本人移住者の子弟として当国社会に貢献することこそ、ボリビアンと日本人とのより心のかけ橋となる事を信じている。

1974年9月1日

「日本での技術研修を終えて」

四季の美しい日本の土を踏み入れてから1年半、今青空の下で、自然は色ずき…そして私の日本での技術研修は終ろうとしている。長かったのだろうか、短かったのだろうか、代にせよこの1年半の月日は、私の人生の一部であることは確かであり、これがより美しい想い出として、心に残ると共に、未来へのつながりとなり、何れはすばらしく咲く花となることを信じていたい。

今、私は、この期間が無駄ではなかったことを強く自分に言い聞かせている。

昭和29年11月 私は長崎のある田舎で生まれた。小学校3年に入ると間もなく、南米はボリビアへと移住した。もちろん家族移住である。それから12年目の春、昭和50年4月、私は1人の移住者子弟技術研修生として再度、故日本の土を踏踏みしめることが出来たのである。

私は、この技術研修に巨大な広さ、自然と緑に囲まれた南米に対して、高校でも一步踏み入れた畜産を専攻した。

私の日本での技術研修は長崎県畜産試験場にて初まった。同国からの外の2名も同じ畜産専攻で一緒に研修を行った。外国からの研修生は私達が

初めてだと言う當場では、想像以上の心使いで、本当によくしてくれたものである。

私達、ボリビアからの3名、そして県内からの1名、計4名の研修生で気軽に楽しい寮生活を過ごすことが出来た。

肉用 専攻で研修をすすめた。午前中実習、そして午後講義と実にめぐましい研修であった。當場では家畜の飼養管理はもちろんのこと、牛舎作りを初め、草作り、乾草作り、サイレージ作り、除角、削蹄、去勢、妊娠鑑定、人工授精など…あらゆる実習を行ない出来るだけの畜産技術を身につけたつもりだ。

講義の方では、日本獣医師会による研修用テキスト、上坂章次著による「畜産学概論」などの教科書を用いて教わった。又、當場研修中は、場内で行なわれた審査研修会や佐世保での海外事情教育高校生夏季研修会などにも出席することが出来た。場外研修としては、東北地方への1カ月間の研修旅行も行なった。この研修旅行では3週間の明治乳業岩泉工場でのチーズやバターなどの乳製品製造実習及び、農林省東北農業試験場、岩手畜産試験場、岩手畜産流通センター、山地酪農家などと、色々な所を見学することが出来た。

このようにして、長崎県畜産試験場での1年間の研修を無事終えた後、残りの6カ月の研修にと、日本でもっとも畜産のさかんな北海道へと足を運んだ。そして最初の2カ月間は、北海道の「へそ」とも言われる富良野の八幡丘にある富士牧場にて、酪農実習を行った。北国の酪農家では、めずらしい経済的施設が何よりも参考になった。搾乳から始まり、搾乳で終ると言う酪農家の1日…すばらしい体験だったと思う。

だが、1年半と限られた研修期間…そう1カ所にのんびりとしている訳にもいかない。そして、最後の仕上げにと十勝平原の一角にある日本唯一の総合牧場、農林省十勝種畜牧場へと移って行った。

国の牧場だけにすばらしい設備、それに北海道ならではの広さ……それが當場に對しての私の第一印象でもあった。ここでの講義は、より一層、私の牧畜に関する知識を広めてくれた。実習面ではやはり、前と同じ肉用牛専攻で行ったが、黒毛和種を飼っている長崎県畜産試験場とは異って、ア

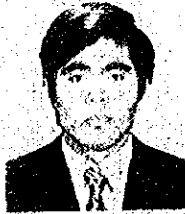
ーディアンガス、ヘレフォードのような、外来種が主だったため、別の体験が出来たことは意外な収穫と言えよう。又、當場研修所の行事の一つでもあった10日間の民間実習にも参加することが出来た。この時の私の実習先は新得にある「南新得牧場」であった。800頭の肥育牛を飼っている當場では経済的なD形ハウス、それに濃粉滓やスイートコーン滓のような経済的飼料、色々と参考になった。しかし何んと言ってもこの十勝種畜牧場に来て、一番喜ばしかったことは、毎月2回程度行なわれた場外研修である。この研修旅行では、農林省日高種畜牧場を初め、農林省新冠種畜牧場、畜産試験場、数々の肉用牛牧場、そして道内の有名な酪農家、音更共進会、十勝総合共進会、全道ホルスタイン共進会、etc

當場でなければの見学、そして研修であった。このようにして私の1年半の日本での技術研修は終りを告げようとしている。今では何かが良き思い出として、消えることなく強く心に刻まれている。実にすばらしい、そして充実した1年半の研修だったと信じていたい。そして、この日本での研修で得た一つ一つの貴重な体験をこれからの人生で十二分に生し、着々と自分の道を開いて行くつもりだ。

昭和51年9月20日

「日本での技術研修を終えて」

ボリビア国・サンタクルス州・オキナワ移住地
宮 城 邦 夫



昭和50年4月2日に国際協力事業団の第5期研修生として羽田空港に到着して以来、早くも1年半という研修期間も終りに近づいてきました。

最初の一年間は、雲仙と有明海がよく見わたせる。たいへん景色のいい長崎県畜産試験場で畜産の研修を受けました。こちらの試験場では肉用牛の黒毛和牛と、乳用牛のホルスタイン種、そして、家畜人工授精に使う精液の採取を目的として、ホルスタイン種の種雄牛も5頭飼っていました。

試験場での研修は、午前中実習、午後学科というようにわけて行い実習も肉牛科、草地科、酪農科にわけて、1週間づつ行い、肉牛科での実習は牛舎の掃除、えさの給与、そして月2度の牛の体重、体尺の測定、えさの採食について行動調査などをやりました。草地科では、肥料まき、草取り、牧草の再生、収量の調査、サイレージ、乾草の造り方など、これらの実習は、ほとんど試験場の先生方に実習をしながら説明をして頂き、その指導のもとでやりました。そして酪農の実習は、最初の頃だけ朝と午後の1日2回の搾乳、えさの給与、牛舎の掃除などをやりましたが、一年の後半からは、ほとんど肉牛を中心に実習をやり、月曜日から金曜日にかけて、午後からの講義については、最初の頃は、畜産を全般にやりましたけれども、最後の方は、家畜人工授精師の資格試験がありましたので、そのために1ヶ月くらい前から、特に研修生4人のうち3人が、ボリビア出身でしたので、むずかしい漢字の読み方など、講義はほとんど家畜人工授精にかんして行い、おかげさまで合格する事が出来ました。

この一年間の内に僕の生れ故郷である沖縄にも帰り、そして帰りを利用して鹿児島、宮崎、熊本など旅行し、そして研修の後半には、岩手県にある明治乳業の工場でチーズ、バターなどの研修を受け、その後、酪農がさかんである。

北海道まで足を運び、時間のゆるすかぎり旅行しました。こうして長崎での一年間の研修を終り、残り半年の実習は、北海道でする事にしました。実習先であった富士牧場にはじめてついた時、まだ雪がつもっていたのがっかりしました。朝早く搾乳に出る時は、1秒でも多くねていたいという気持だけでした。しかし夏には、乾草上げなどで、いちばん忙しい時でしたけれども、いろんな大学からの実習生が来ていちばん楽しい時でした。

こうして1年半の研修期間、国際協力事業団をはじめ、試験場の皆さん、明治乳業の皆さん、富士牧場の皆さん、これら、多くの人々の御協力、御指導によって畜産にかんして、基礎的な知識、技術を身につける事が出来た事を心から感謝しています。

「研修正として」

ボリビア国・サンタクルス州・オキナワ移住地
池 原 正 英



月日の立つのは早いものです。コロニア沖縄も今年で入植20周年をむかえます。

「米の沖縄」と呼ばれたコロニアオキナワも米単作農業で失敗し、現在は事業団の指導の下で機械農業で綿作が始められています。しかし、綿作も思うようにいかず、問題が多く畜産に変えて行こうと言う人達が多くなりました。なぜなら、当初から牧場計画で草を植え、牧畜を始めていた人達の生活はゆたかです。

将来ボリビアは酪農がさかんになると思います。特にサンタクルスは土地が広く、酪農ができていけると言えます。

綿作に比べて、畜産は人類の衣食住としてなくてはならないものです。

世界の人口増加に比べて農産物の生産は少なく、これからどこかの国で、がしするおそれがあります。将来は農業の時代が来るでしょう。そのため、農産物を技術的に生産する事が大事だと思います。今コロニア沖縄では大牧場主に夢をかけている人達は牧草を植えるのに一生懸命です。サンタクルスでは技術的に家畜の飼育が不十分であり、農産物の加工もまだまだなのです。

畜産技術の進んだ国で研修し、おくれたボリビアと比較して、みっちり勉強したいと思います。研修生として学んだ知識を持ちかえりコロニアの畜産に少しでも役立つ事が出来るようにがんばりたいと思います。

「日本での技術研修を終えて」

第5回子弟技術研修生として南米から日本へ来日してもう早1年半の月日がたち去ろうとしています。帰る楽しさと別れる淋しさと、ちょっと複雑な気持です。

この1年半、ふりかえって、思い出しますといろんな事がうかんできます。着いた当時の印象、

研修、研修旅行、合同研修会、苦しかった事、楽しかった事、それぞれ一つ一つの大事な思い出となり、人生の中の大きな社会勉強になったと思います。この研修期間に多くの事を学ぶ事ができ、精神的にも成長した事を心強く、ありがたく思っています。

畜産を専攻して、初めの1年は長崎県畜産試験場で、おもに牛について研修を受けました。着いた翌日から、毎日ふん尿処理の仕事ばかりで、日本の畜産を知らないため、場長に抗議を申し込みに行った時もありました。土地の狭い日本では、ふん尿処理が大きな公害問題となっています。南米ではあまり考えられません。

畜産研修は講義の時間が少なく、おもに実習で体で覚える事になりました。同じ畜産でも国がちがえば多少のちがいが出て来ます。放牧と舎飼では、いろんなめんてちがって来ます。はたして、この日本での畜産研修が帰ってから役に立つかどうか、こまかすぎてばかばかしい事もあり、いろいろ考えた事もありました。でも与えられた研修はやらなければいけません。自分なりに判断し、いろいろ勉強し、そして家畜人工授精師の色許は上位の方で取る事が出来ました。

同じ日本でも九州と北海道では家畜のかい方がちがい、それなりの研究が必要であり、勉強が大事だと思います。帰ってからも、いろいろ研究しなければいけない事がたくさんあると思います。

残念な事は、日本での技術研修が時と場合によっては、すぐ応用されないことが多いと思います。5年、あるいは10年先、それぞれ応用する時が必ず来ると思います。この研修がどれだけためになったかは、帰ってから実際にやってこそ、わかって来ると思います。

畜産をやるにはまず広大な土地、立派な草地造成、いかに広い南米が畜産に有利であるか、そして夢を持つ事が出来る事は日本へ来てからよりの収穫だと思っています。

研修旅行も北は北海道から、南は沖縄まで、日

本一周する事が出来ました。東北では岩手県の岩泉明治乳業株式会社で3週間の乳製品加工についての研修、牧場廻り、そして沖縄では世界初めての海洋博、17ヶ年ぶりのふる里に帰り、それぞれみな研修だと思います。

残りの半年は沖縄県畜産試験場で研修をじました。南米とはほぼ同じ気候で、おもに亜熱帯地方の草地造成が研修になりました。いままで乾草とサイレージの事については聞いて知ってはいましたが、実際に乾草を作り、トラックの何台も乾草上げをすればどういふものか、そしてどうして作るのか体で覚えました。サイレージのふみ込みの時は足が痒くなるようでした。

雨期と乾期に分かれているボリビアではサイレージより、乾草の方が乾期に多いに役立つと思います。

養豚の研修も2ヶ月間しました。運動場の少ないため、家畜のほとんどが足腰が悪く、いかに運動が必要であるかわかります。家畜衛生については予防対策が進んでいるため、日本では病気の家畜が見られず残念でした。この1年半、勉強になる事、ならなかった事、良い面、悪い面、みな研修だったと思います。日本へ来て初めて、南米の良さ、悪い所、そして日本の良さ、悪い所、比較してわかって来ました。最後に国際協力事業団の職員の方々、そして試験場の職員の皆さん、この1年半の技術研修を見守って下さった事を心からあつくお礼を申し上げます。

日 本 の 印 象

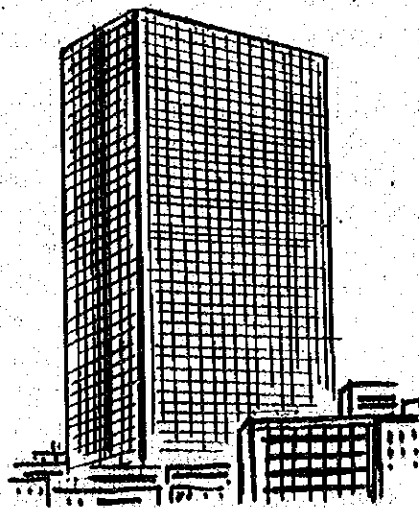
「日本の印象」

ボリビア国・サンタクルス州・オキナワ移住地
宮 城 邦 夫

僕は外国へ移住してから20年後に帰国した事になりますが、日本から移住した時まだ2才ぐらいだったので日本の事はまったく覚えていませんでした。しかし友達から話を聞いたりして日本はとっても進んでいる事はわかりました。そして今度日本へ来て見る事や知る事が出来るのはほんとうに嬉しい事です。

僕は初めて研習生の皆さんといっしょに羽田空港に到着した時、やっと日本に着いたかと思いました。しかし見る所や行く所は僕に対してまったく未知な所ばかりだったので祖国へ帰って来たという感じはあんまりしませんでした。それから日本へ来て感じたのは、ボリビアでは見た事もない自動販売機、タクシーの無線機、バスの設備など、よく考えて作ってあると思いました。しかし日本は国が小さいせいか、市には公園などが少ないのはちょっとさびしい感じがしました。

それから僕達が日本へ来た時、選挙前だったので当選者の演説を聞いたり、またはそれぞれ選挙に勝つためにせんでんをしいる所を見ると、日本はその面ではとても自由だなあという感じがしました。



「日本の印象」

渡伯して16年、何時の日にか帰らん……こんな思いを胸に抱きながら今まで働きつづけてきた私の夢は、昭和50年4月20日午後3時20分東京羽田空港に着陸とともに現実となって実現したのであります。

人口が世界一密集している東京のイメージは、車と排気ガス、緑を失ないひどい公害、これらは私がブラジル滞在中での東京に対する予備知識でありました。ところが空港を一步で「おやっ」と思いました。私の想像していた東京とは違って車など余り混雑しないでよく整備されているし、道路も非常に整っていることです。日本に来るまでの2週間をブラジルの大都会サンパウロ市で生活した私には東京都が意外と静かな都に写りました。

翌日、横浜の根岸駅から東京へ向かう山手線に乗ってみて初めて人間の多いのにびっくりしました。電車内の混雑、猛ラッシュを目の前にして「やっぱりここは日本だなあ。」って感じました。秒単位で連発に走る電車、そして発車時間の正確さ、山手線を走る電車こそ日本が世界に誇る唯一の交通機関であり正に日本の心臓の役目をはたしていることを新たに認識しました。

研修先の山梨果樹試験場に向かう列車の中で、老いたお婆さんが掛ける席もなくて困っている様子が目に入りました。このような場面はブラジルでは見られないことです。誰一人として、お婆さんに席を譲ってあげる者もなく、皆んな関係ない顔して無関心を装っています。これが私の住んでいたブラジルなら、老人や婦人に対しては、優先的に席を譲る習慣が身についていますから、日本にきてこのような風景を目前でみると残念でなりません。それに反して日本のお店は、お客さんに対してはすごく親切です。こまかい所までサービスがゆき渡り徹底してます。これもみな自己の利益を考えての演技にみえます。この矛盾は我々外国暮らしには、良く理解できません。以上のような事が、私が日本に着いて1週間過ぎた現在

ブラジル国・パラナ州・日光移住地
有 田 和 人

偽りのない日本の印象です。これは1週間という短期間に受けた感想でもあり、部分的な様子を見ての印象であるから、私の研修期間の終る1年半先には、また現在とは違った印象が残るかも知りません。

「日本の印象」

ブラジル国・パラ州・第2トメアス移住地
平 水 繁

今回の国際協力事業団の移住者、子弟技術研修生として合格し、母国日本で勉強出来るようになって大変光榮に思っています。応募の動機は、近い将来牧場をやりたいという希望もあって、研修目的は牧畜です。が、その外にもう1つありました。それは、私は16才の時両親と共に現在のトメアス移住地に入植して、それ以来11年間アマゾンという、日本に比べれば比較にならない程の文化程度の低いまた限られた狭い社会的条件の中で仕事仕事に明け暮れて成長してきました。そうした自分と、相反する恵まれた、生活環境、社会的条件の中で成長した同年輩の人たちがどんな考えをもって成長しそして現在どのような生活をしているだろうかということにすごく興味がありました。そして彼等と、比較して、自分は世間知らずの野蛮人だろうと懸念しておりました。そういうことから、是非日本に行って、出来るだけ多くの人たちと接触を持って、見聞、視野を広め、多くの知識習得して、人格の向上をはかって、はづかしくない社会人になりたいと思い応募しました。日本に到着して、最早1カ月を過ぎ、色々と目で見、耳で聞き肌で感じてきました。羽田から横浜に向う途中、目で見て一番先に気付いた事は街がゴミゴミと雑然としているということ、道路が狭いということ、それから田舎（故郷）に行ったら道路が完全に近い程舗装され、あちこちの山や川が改造されて昔とはすっかり変わっていたということでした。一番ショックだったのは、何もかも収縮したように極端に小さく見え、その事で精神的な圧迫されたような感じて身心共にまいったことです。生活環境にあっては、日本は便利づくしであるが反面、そのために経済的に苦しい生活をしているのが現状のようでした。日本のような社会保障の高い国でも、働けるまでは働かなければやって行けないというのがちょっと以外でした。また、同年代の青年層においては、一般的な見地から、現状に甘んじて自主性の乏しい生き方をしているように見受けました。その点

自分は、色々な面で不自由はしましたが、今まで苦勞して努力した甲斐があったと、決して無駄ではなかったと、はじめて日本に来てみてそれがわかりました。そして自信を得ました。

「日本の印象」

ブラジル国・サンパウロ州・ムンドノーボ移住地
田 中 愛

日本へくると決ってから1カ月間というもの
は旅行の支度をしたり、いろいろと手続をしてい
るうちにあっという間に過ぎてしまいました。ブラ
ジル・ニューヨーク・アラスカ、気がついたらも
う日本の土を踏んでいました。

その日はもうおそかったので移住センターに行
きこれからの1年半の研究生活に不安と希望に胸
をはすませながら床につきました。翌日、私達は
東京見物をしました。そこで感じたことという
とまず第1に新しいものと古いものの調和がとれ
ていること、第2に全体的に緑が少ないと言
うことでした。後者については、現在の日本にと
ってもっとも重大な問題の一つだと言
うことをつくづく感じさせられました。

2日くらい東京見物をしてから私は研修地でも
あり、またふるさとでもある秋田にきました。ま
ず着いて最初に目に入ったのは「雪」でした。ブ
ラジルで育った私にはとてもめずらしく、そし
てきれいでした。こと秋田は東京から北の方
に7時間くらい汽車に乗った所にあり農業のさ
かんな県だということです。

私は今農業大学でこの学生たちと共に生活
を勉強をしています。この大学は八郎潟という
日本で2番目に大きな湖を干拓した土地に建
っており、まわりは広々とした水田によって
囲まれていてとても良い所です。水田を見る
のも初めてな私にとって早く実をつけた
稲を見たいと思っています。たくさんの生徒
と友達になりましたが、なんとなく時間にお
われているような感じがします。(私がのん
びりしているのかな?)もう少しのびのび
とした気持ちを持ってもらいたいと思
います。

これから約16カ月間日本に居ますが、人々
の生活などを見、聞き、学び有意義に過
ごし、ためになることをたくさんブラジル
に持って帰りたいと思います。

最後にこれからの農業を背おって行く
学生たちもブラジルに来ていろいろと学
んでくれることを望み私の「日本の印象」
とします。

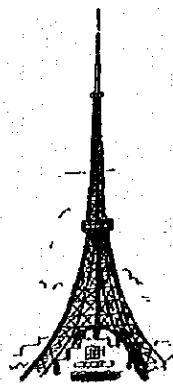
「日本の印象」

ブラジル国・パラ州・第2トメアス移住地

遠 藤 憲 一

私が日本に来たのは4月2日でした。東京に着いて一番最初に感じたことは寒さが身にしみ、ブラジルとは気温の差が相当あるのだと思いました。それと同時に文化のよく発達した国だと思いました。当り一面見廻してもビルや工場などが密集し人々も車もすごくラッシュしていて歩くすきもないくらいでした。空を見ても太陽が見えず、スモッグや雲だけがどんよりと広がっていました。私は「さすが日本の首都だなあ」とつくづく感じました。また電車に乗ってもすごい人ばかりでたいへんでした。しかし、やはり目にはいったのは東京タワーでした。写真でしか見たことのない私は実際に見てびっくりしました。次の日私達はさっそくタワーにのぼって見ました。そこからは東京一面が見おろせました。東京での感じはこのようなことでした。

そして7日にこの試験場に来ました。ここに来て感じたことは、東京とはうって変り広大な草原や耕地などが広がり、太陽もギラギラとかがやき空気がきれいですがすがしい気持ちになりました。そしてここに来て牛というものを初めて見ましたそれから食事になれるまでは苦労しました。ブラジルのごはんはボサボサしているのに対して、日本のごはんはネバネバしていて口に合わないような気がしました。そしてはしを使うのにはとまりました。肉が食べられないのには残念でした。向こうでは毎日肉でしたがこちらではめったに肉は食べられません。そして研修も最初は苦労しました。仕事の仕方がわからないのでとまってしまいましたが現在はだいふなれてきました。講義の時間は漢字など書かれるととまってしまいました。ひらがなをふってもらいノートに自分にわかるように直して書きわからないことなどはメモしておき、後から専門の研究員や友人に聞くようにしています。これからもうたいへんだと思いますが一生けん命がんばって技術を身につけてかえりたいと思います。



合 同 研 修



◦開催期日

昭和50年10月25日(土)～10月27日(月)

◦開催地

三重県

◦日 程

10/25：三木本真珠・ぶらじる丸見学

10/26：団体，開会式出席

10/27：日本鋼管 津造船所見学

赤塚植物園見学

「合同研修に参加して」

アルゼンチン国・ミシオネス州・ガルアベ移住地
水野悦郎

昭和50年10月25日から27日まで第5期生合同研修に参加させていただき、半年ぶりに懐かしい同期生と顔を合わせた。4名は南米から遅れて来て、初めて会う同期生もいたが今年の3月飛行機で初めて会ってから、ほんの数日間生活を共にしていただけなのにまるで兄弟のように元気で再会できたことを喜びあい、半年間の日本での学習とか毎日の生活について懐しいポルトガル語、スペイン語を使って、いつはてともなく話し合い、和やかな雰囲気の中で合同研修の第1日目が始った。まず鳥羽の御木本真珠とブラジル丸を見学した。御木本真珠では真珠を作る初期のころからの資料の教々が展示してあり、真珠ができるまでの行程を実際に見ることができた。アコヤ貝に核を入れてから、真珠ができるまで2年から5年もかかり、その間に天敵などで半数は死んで残ったものの中でも良質な物は少ないという真珠の貴重さと美しさを知った。また一人の人間の思いつきと努力がいかに大きなものかということは人生においても大いに学ぶものがあると思う。それからブラジル丸を見学。ひさしぶりに見る移住船は私たちが夢を持ってアルゼンチンへ移住した時の事を懐しく思い出させてくれた。

26日の日曜日は第30回三重国体開会式を見物した。さすがに国をあげての催しだけあって規模が大きく数万人の観客と選手を見ていると、まるで大地が揺れ動いているような錯覚を起した。一人々の人間は小さくても大勢の人達が協力して一つの物事を行えばあんなにすばらしい光景が産れるのか、またあの大勢の人達がよくまちがわずに行動できるものだと感心した。天皇皇后両陛下もお目見えしてブラスバンドの優雅な音楽と数万人の観客と選手の興奮の高鳴の中で聖火台に火が着いた瞬間の感動。静かに広がる拍手、この一瞬は選手の人達ばかりではなく、誰しも生涯忘れることはないだろう。この日は伊勢神宮を御参りして津のターミナルホテルへ泊った。翌朝は日本鋼管津造船所を見学。

ここは日本で5番目に大きな造船所で50万トンタンカーを作るドックを2つ持っていた。今のところ50万トン級のタンカーは必要ないので、現在20から36万トンのタンカーを年間6隻作っていて、そのうち5隻は主にノールウェイなど外国への輸出用だそう。実際に船を作っているところを見学した。鉄材の加工、部分品、ブロック作りから組立に至るまで能率的に工場が配置されていた。20万トン級の小山のようなタンカーを見てその大きさは想像以上で化学の進歩とともに人間もすごいものを作るようになったものだと感心した。

昼食後この研修で最後の赤塚植物園を見学。このあたりの土は黒ボク土壌で野菜や米などの作物を作っても良い物がとれず貧しい所だったが、10年ほど前からこの黒ボク土壌は観葉植物に適していることがわかり、ひとつことを観葉植物の名産地にしようではないかということで始めたところちょうど日本の高度成長の好景気に乗ってどんどん伸びて、今ではブラジル、ハワイなど世界に手を伸ばすほどに成長して、これから大きく発展していこうということだった。ランの繁殖にも種を使うと、本と同じものができないので、生長点培という高度な方法を使って増殖していた。

この3日間同期生といっしょに色々な珍しい所また為になる所を見学させていただき、ほんとに楽しく有意義の毎日でした。27日午後4時、名古屋駅で、これからの1年間もおたがいに頑張ろうと励まし合い、みんなと別れて帰路についた。

「合同研修に参加して」

期待して待った合同研修旅行が25日12時名古屋駅集合で始まる。僕など一番遠い岩手からの出発…24日の夜行で出発しなければいけない…盛岡22:50分発、上野行急行十和田2号の寝台車で出発……?初めて乗る寝台車、どんな所だろうと思い指定された自分の場所に行ってみるとせまいベットが3段になっていてその中段だったねがえりもできないような所でびっくり、でも横になって寝るだけましかな?…25日朝7時半に上野に着き電車ですぐ東京駅に行ったが……9時24分のひかり号に乗るにはずい分時間があると思ひ、同じ待つなら名古屋でと思ひ、すぐ米丸ひかり号に乗り名古屋に向ひ、途中びっくりした。と云うのは、朝食でも取ろうと思ひ食堂車に歩いて行ったら長崎に居るはずのポリビアからの研修生3人が乗っていた。一瞬わからなかった。どこかで見た事がある人だなあと思ひたけどそれでもお互いがすぐわかり話しかはずむ、どこから来たと聞くと“岩手から”と言うから…マサカーなんて言うと“いや本当だよ”と……よく聞いて見ると岩泉の明治乳業と言う所に来てもう何日かで終り又、長崎に帰るんだって、…電話ぐらいくればいいのに…本当に。

名古屋駅に10時少し前に着き集合時間まで2時間以上もあるし4人で地下街をブラブラ歩いて見たけどすごい人でわからなくなって時間におくられてはと思ひまた来た所を帰った。集合場所に12時15分ぐらい前に行くとすでに来ている人が何人かいたし5分おきにつぎつぎ集ってくる。…皆んな元気か…変らないなあ、…やはりなつかしかった、半年ぶりだもの関君が12時5分前着きギリギリセーフ、……ぶじ皆んな時間まで集った。

さあーいよいよ出発!27日の夕方まで皆んなと思ひ出のこる見学ができるようにまず最初の目的地御本木真珠島に向ひ。そこで真珠ネックレスがどうしてできるか。その真珠がどうして育てられるかを見学して廻る。アコヤ貝に真珠の中心と

パラグアイ国・アルトパラナ移住地 工藤 則 吉

なる核(貝のつぶ)を入れあみのかごに入れて海にしずめ2~5年おくだけで美しい真珠が育っている…ただおどろきと感心して説明を聞きました日本の海は汚れていると話しや、本などで聞いていたけれど、…あーやはりまだ、きれいな海があるんだとうれしかった。そのきれいな海で海女達が生活しているって最高に美しく感じました。真珠島を見学し終りたくさんの人達を南米に運んだ…ブラジル丸を見学。僕の場合南米に渡る時はブラジル丸ではなかったけれど同形のアルゼンチン丸だったせいかな…やはりなつかしかった。あーこんな船で行ったんだってと船の中を歩いて13年前の事を思い出して一人楽しかった。ブラジル丸見学で25日の日程を終りホテルに帰る。

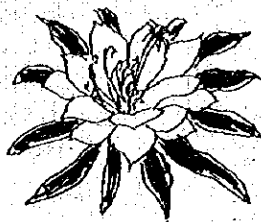
26日は6時半起床で7時朝食をすませ7時半出発と早かった。今日の予定は国体開会式見学、伊勢神宮参拝、開会式場には五十鈴川駅から30分ぐらい歩き9時30分ぐらいに到着。そこで午後2時まで座る。一競技を見れないのが少し残念でしたが、すばらしいものでした。集団演技・合唱伴奏と、どれを取っても感心しました。特に幼児達の演技にはびっくり良くあんな小さな子供達があんなにそろってきれいに演技するものだ、感心させられました。選手入場、炬火入場点火、大会長および文部大臣挨拶の後、天皇陛下のおことばを賜わり、選手代表宣誓、閉式通告で2時までゆっくり楽しく見せていただきました、…?ただすばらしいの一言です。パラグアイではほとんどこのような大きな競技大会はないので、やはりこのようなスポーツの面では日本はすばらしいと思います。

2時に会場を出て伊勢神宮に杉の老樹の中にある社殿、そこにいって参拝するとホット心が休まる思ひです。やはり僕も日本人です。天皇陛下も年に1回は参拝すると言うし、新しい内閣ができると総理大臣が行って参拝すると言うし、そのような所に僕達も行て参拝できるんだからなぜかみような気持ちでした。約2時間で見え廻ったり

近くで買物などしたりして4時、2日目の日程も
終り帰る。さすがに2日目は疲れた感じで早くホ
テルに帰り休みたかった。

27日いよいよ研修旅行最後の日。ホテル出発
9時とゆっくり、今日の予定は津造船所見学と赤
塚植物園、津造船所に行き係の人に説明を聞き…
25万t～35万tもの大型タンカーを年間6隻
も建造できるというんだからびっくりしてしまっ
た。その船がどのようにして造られるのか見せて
いただきました。そこで約1時間30分ぐらい見
学して11時ごろバスで帰る。……

昼食の後赤塚植物園を見学、説明を聞きながら
洋ラン、西洋ジャクナグとその他色々すばらし
い設備で栽培されている。3日間こう言ったすば
らしい所を色々見学させていただきたいへんあり
がとうございました。特に全員参加でこのような
研修旅行をさせていただく事によって皆さんが互
いの様子を聞き合い又、励まし合い残された研修
期間を頑張る事ができます。本当にありがとうご
ざいます。



「合同研修に参加して」

ブラジル国・サンパウロ州・ビニャール移住地

広瀬 昭 憲

私達第5回移住者子弟技術研修生最初の合同研修会が10月25日から27日迄の3日間三重県で行なわれた。私にとって、かけがえのない思い出の一つとなりました。私達サンパウロ支部の研修生は手続きの都合で日本到着が遅れた為、他の地方の研修生とは今回の合同研修会が初めての顔あわせになりました。でも初めてあった人達にもかかわらず、何か他人には見えぬ知りあいの様であった。これも皆同じ南米という外国で農業を営み、又同じ研修生という思いがあるからかもしれません。

最初の日には真珠の名で知られている御木本真珠養殖所と、なつかしい移民船ぶらじる丸見学で、御木本真珠養殖所では真珠のうつくしい輝き、そしてそのうつくしい真珠になるまでの行程と真珠貝取りの海女の作業等見学・又ぶらじる丸は9年前私が両親弟達と共にブラジルに渡った際乗った船だったので。中の様子は変わってはいないがデッキに上がり海を眺めているとその時の事が思い出され自然に胸がゾーンとなる思いでした。

2日目は第30回国民体育大会開会式参観と伊勢神宮参拝で三重国体開会式はこの合同研修会の通知があったから最も楽しみにしていたもので、五十鈴川駅から開会式場である県営総合陸上競技場までの約30分程の道のりを歩いて行き、開会式を見にいられる人の波に驚かされた。又式場内では私達研修生は最前列にすわる事が出来ました。開式準備の集団演技に始まり、天皇皇后両陛下が御臨場になられ写真や新聞等でしか拝見した事がなかった両陛下を近くで拝見出来た事は、私にとって2度とない良き思い出となる事でしよう。選手団入場ではブラジル選手団を先頭に入場行進が始まり、参加人数は10数名と少数でしたが私には一番印象深く、又堂々としていた様に思った。なつかしさを覚え知らず知らずのうちに手を振り心の中では、ビーバノブラジルノと叫んでいた私でした。第2の故郷であるブラジルそして今ではそこで生活している私にとってブラジルと聞くだ

けでなつかしさを覚えるのですから、そのブラジルからの選手団が入場して来た時、興奮したのも無理ないのでは？……。三重国体開会式も大会旗、炬火入場、点火、選手代表宣誓と進み、ブラジル代表選手団が退場するのを見送って式場を後に伊勢神宮参拝へ。私には2度目でしたが何度来ても静かな気持ちにさせて来れる所です。

3日目は日本鋼管津造船所と赤塚植物園見学で、今回の合同研修会最後の日でこの頃になると消極的な私でも皆とうちとけて話せる様になり、この合同研修会に出席するまでの不安が少しづつなくなって来た。日本に来て7カ月の研修期間が過ぎたのに自分はこの7カ月間何を学んだのか。自分には技術を習得するだけの能力がないのではないか。研修期間中に自分で満足できる技術を習得して帰国できるのだろうか、という不安があったのです。それも同じ研修生達と話し合っているうち気持ちが落ちつき、今までの研修期間を振り返ってみて、形にはあらわれていない何かが身についているのを知り、この不安が早く技術を取得しようという焦りからだとなり、ズート忘れる事ができずなやんでいたものが消え、気持ちが少し楽になった様に思います。

日本鋼管津造船所見学でのあのスケールの雄大さを見ていると、私の気持ちの小ささが恥しく、残りの研修期間を有意義に使ひ私の人生で最も意義のあるものにしたい。

今回の合同研修会ではふつうの研修では学べられない様なものまで学び、とてもうれしく又楽しく研修し、この様な機会をつくって下さった事業団、そして私達研修生と3日間行動を共にしお世話して下さい下さった方々に感謝し、これからもこの様な機会を作って下さる事をお願いして今回合同研修会のレポートとします。

「合同研修に参加して」

パラグアイ国・イグアス移住地
関 節 朗

関西旅行から帰って、初めて三重国体が、開催される事を知りうれしい気持ちでいっぱいでした。

10月25日、名古屋で久しぶりに、研修生達といっしょになり事業団の方と、電車で三重県に向いました。

3日間の合同研修僕なりに、研修先で、一生懸命に見学しました。実際に見学した所は期待していた以上にすごく強く、心に感動しました。

今回の合同研修に参加して勉強に又為に、なった事は大別して4つ程あります。

1. 日本の高度な工業技術を、実際に、自分の目で見る事が出来た事です。特に造船世界1の技術は、想像以上でおどろくものばかりでした。

2. 日本の古い養殖の歴史をもつ、御木本真珠の島を、見学出来た事、特に女性のアクセサリとしては1番と言われる真珠が、養殖されるまでと、アクセサリになるまでの過程を見学出来た事、この島を見学して一番印象強いのこったのが、回りの景色と、海が美しくかった事です。

3. 洋ランの人工栽培です。

養蚕では硬化病菌、こうじカビの培養を、寒天培地を使って、実際に培養した事がありますが、植物を寒天培地を、使って栽培する所を見たのは初めてで、近い将来南米でも考えられる事なので、とても興味がありました。

4. 研修生達との話し合いが出来た事。

研修生一同が、移住センターで別れた時とちがって、別人のように気軽に話し合い、意見の交換をし、研修の結果、研修の悩みなどを話し合った事です。この7カ月間の研修期間、けっして問題がなかったとは言えないし、又あったとも言えない皆んなとの話し合いの中で、自分の能力に赤面を感じ又、痛感した場面もありました。話し合いの中でお互いの何々か知らないものを、修得出来た事は確しかです。のとり少ない研修期間を、これらの体験をわすれずに頑張って行くつもりです。

なお次回からもこのような合同研修が催される時はぜひ参加させていただいたら幸いと思ってお

ります。この合同研修に参加出来るように、御協力して下さいました事業団の方々、及び、三重国体の役員の皆様に心から感謝をいたして終りとします。

第16回全国農村青少年 技術交換大会に参加して



開催期日

昭和51年7月6日(火)～9日(金)〔3泊4日〕

開催地

オリンピック記念青少年総合センター(東京都・渋谷区)

「第16回全国農村青少年
技術交換大会に参加して」

ボリビア国・サンファン移住地
牧 尾 孝 司

「若さで築こう緑の大地」をスローガンに7月6日から7月9日の3泊4日で行なわれた全国農村青少年技術交換大会は、将来日本農業の中核として期待する新しい農業者たちの交流を深め、これからの農業や農家生活のあり方についての意見やプロジェクトの交換を行なうとともに、現地訪問等を実施して希望をもって農業を推進しようとする意欲を高揚することを目的に開催された。

日程にしたがいねらい通りの大会が実行された。実にすばらしい又当大会が必要以上のものであることを僕は強く感じた。

この大会で特に印象深く残っているのは、開催初日目の行事の一部であった。孤独に身をさらし愛と勇気を燃じつづける情熱の実践家。そして若い根っこの会会長でもある加藤日出男氏の講演である。そこには僕等の心をくすぐる何かがあり、若者そして生きがいと言うものを再度考えさせられたものである。

又、この講演で僕は言葉の美しさと方言のもつすばらしき、ふしぎな力に気をひかれたものだ。

僕はこの全国大会に参加して現代の日本の農業への知識を広めたとともに、その未来を考える青少年のこれらに対する情熱が熱く自分にも伝わって来たのを感じた。

そしてこの機会に数多くの友情をつかめたことが当会においての最高の収穫だと信じている。

全国農村青少年技術交換大会、そこには、若者として生きる手ごたえを力強く感じるものがあった。

7月30日 (十勝種畜牧場にて)

「私の技術交換大会での4日間」

ブラジル国・パイア州・サルバドール首都

吉井 丈治

私は7月6日より行なわれた第16回全国農村青少年技術交換大会に参加させていただきました。所は東京都オリンピック記念青少年総合センターでの4日間でした。

この大会の目的はこれから日本農業の中心となる新しい農業者達がプロジェクト発表や現地訪問などをして同役の意見を聞き、将来日本農業のため希望をもたらすことである。参加者は農業青年の外、指導者、計600人でした。

この大会で参考に得たのはやはりプロジェクト発表や現地訪問でした。私は現在、群馬県畜産試験場の酪農課でお世話になっているのでプロジェクト発表は畜産、特に牛の方へ耳をかたむけた。中でも興味をもったのは東京都八王子市の石川市郎さんの「私の人工授精法の検討」です。今までの人工授精では0.5 ccストロー凍結精液の融解温度→35°～41℃、融解時間15秒で種付をして60～70%が出ています。そこで石川さんは同じ5ccの精液を使い、融解温度70℃に上げ融解時間1～2秒という試験をしました。現在では20回注入して5頭受胎が出ています。石川さんはこの結果に不満足でもっと深く検討し、よりよいデータをおねらっているとのことでした。

私が今まで学んだ中では精液の温度が50℃をこえれば精子死滅ということなので、この70℃という高温での試験は非常に難しいと思います。

また、中でもっとも驚いたのは愛知県豊田市の坂春考さんが発表したプロジェクトです。

普通 仔牛一頭に対しての哺乳は：

乳 → 70 Kg

脱粉 → 30 Kg

期間 → 2ヶ月当りでありあまりお金をかけないように出来るだけ哺乳期間を縮めています。

そこで坂春考さんの試験を述べます。

仔牛一頭に対し：

乳 → 409.5 Kg

脱粉 → 196.0 Kg

哺乳期間 → 7ヶ月

育成中に哺乳期間をのばし、乳を沢山与えれば体重がふえ、成牛になると乳量が増加するという考えですが結果はまだわかりません。

私はこの試験に疑問をもちます。結果がうまくいっても手数やお金がかかるので農家の人達がはたして実行するかどうか……

そしてもうひとつ参考になったのは、伊勢原市畜産団地へ農業視察に行ったときです。経営は他の団地と比してそう変りはないが糞尿処理法がめだった。各畜舎にバーン・クリーナーがあり、その下に大きな脱水機が据え付けであった。畜舎から少しはなれた所にひとつのプールのようなかたちの尿や脱水した糞の水分を井戸水とかく拌する「ジョウガソウ」というものがありました。これで糞尿に井戸水を5～6倍ほどプラスして川に流しこむということです。

この日本で畜産を営もうとなればやはり一番問題は糞尿処理のようです。設備に私らの想像以上のお金がかかわれています。

私の今の研修先では現地研修という毎月一回マイクロバスで農家や方方を視察しまわっているけどやはりひとりひとりの経営や考え方がちがいます。私たちはそれを見抜いてより良い考えやテクニックを身につけ、帰国したならば、実行しなければいけないという義務があると思います。また、このような技術交換や現地訪問が二度とあればぜひ、再び参加したいと思います。

「第16回全国農村青少年 技術交換大会に参加して」

ブラジル国・サンパウロ州・グワタバラ移住地
小林 武 久

時は1976年7月6日、所は東京都代々木にあるオリンピック記念青少年総合センターへ、昼近く日本全国から農業にたずさわる若者達がぞくぞくと集まって来た。私達事業団研修生第5期生18名もその中に混じっていた。

この日から3泊4日にわたって行なわれる第16回全国農村青少年技術交換大会に参加するためであった。

6日午後1時、体育館内に男子379名、女子89名、普及員、県担当者を合わせて約560名が入り「若さで築こう緑の大地」をスローガンとした大会の開式が行なわれた。

主催者あいさつ、阿部農林大臣の来賓祝辞のあと、日本4日クラブの歌をうたい閉式となり、その後「若い根っこ」の会々長藤田日出男氏の講演「創造的ロマンに生きる」を聞く。話し方が親しみやすく好感が持てた。

これが終った時点から全員24の班に分れ、5期生もバラバラに分かれて、4日間を一人で過ごすことになった。夜から班ごとに行動し体育館でレクリエーション。その指導法について学ぶが根っから運動神経の鈍い小生は、ダンスを覚えるのに苦労した。

2日目、6つの会場で同時にプロジェクト発表が行なわれた。ちょっとした農機具を自分達で考え、作ったり、実用的な作業衣、カサを利用したエプロン等、アイデアが良くよく考えたものと感心するばかり。また自分の家の経営実績や技術的に自分の仕事をくふうしたり課題が身近かなものが多く、発表者諸氏の熱心な研究心に感心すると共に同じ農業を営む者であることに心強く思った。

その夜のレクリエーションでは班対抗でゲームが行なわれ各班からの選手が出番となれば各班から盛んな応援が出され、班内の親睦を深めるには最高のムードであった。おしまいは熱気ムンムンの会場内、班ごとに肩を組んで輪になり若者達を歌って各自の部屋へと散っていった。

3日目は快晴に恵まれた東京都内をバスで農家

視察。快晴といってもやはり東京の空はボンヤリとした感じで、遠くのビルもがすんでいた。12台のバスはそれぞれ行き先が違っており、小生の乗った3号車は足立区の「ツマモノ」を主に栽培している農家を4戸ほど回り地元青年部と懇談会を行なった。ここでツマモノと語り言葉を始めて聞いたのだが、これはサツミとかスシあるいは他の料理等に添える飾りの野菜。栽培期間は発芽から出荷まで20日間位とみちかく、価格も1束300円500円と高価なもの（これはシントナの場合）で年6〜7回の収穫ができるため、ビルに囲まれた小面積な土地でも経営できるものと思う。しかし、ここで農地に宅地並みの税金がかけられるという新たな問題が出ていることや、現代の後継者がなく、現在の代で終わってしまうというのを聞き残念に思った。この土地の価格を話すと一坪約40〜50万円ということであった。

その夜は大会最後の夜であり、班内だけの自由交換が行なわれた。小生のいた3-1班は女子4名（このうち3名が農家のあととり）男子17名で各自持ち寄ったお国じまんのプレゼントを交換し合い、歌をうたってみじかい時間を和気合い合いと過した。全国から集まっているため、その地方の民謡等が出て情緒がにじみ出て楽しい一時であった。

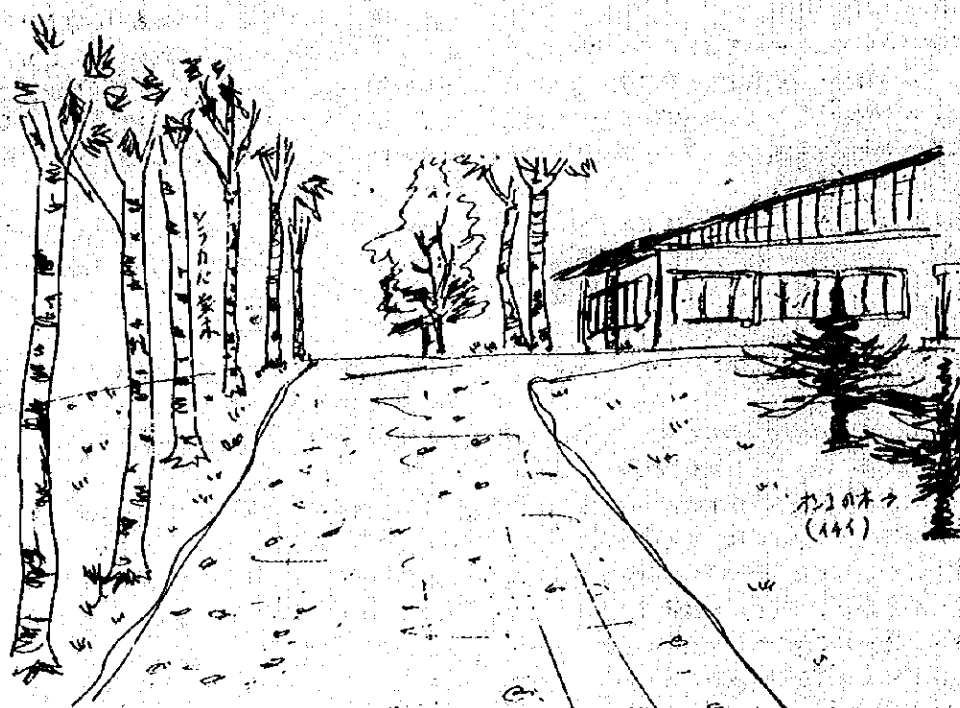
4日目最終日はプロジェクト代表発表、昼食後新潟、栃木、東京は八丈島の各界、都による郷土芸能の神楽や太鼓が披露され、参加者は太鼓の音が響く体育館で一時幻想的な雰囲気満たされたものと思う。

最後にフエンガー賞表彰式が続き、午後4時閉式となり4日間の全国大会は無事終了となった。

大会参加を終え、横浜移住センターに着いたとたん休むうから疲れが出たのでゆっくりと風呂につかって、すぎた日々を思い返す。まだ何か物足りなさを感じないでもなかったが、プロジェクト発表、現地視察、レクリエーション……どれをとっても新しく見たものばかりで、これから自

分が何かをして行く上にも参考になることが数多く見い出された。特に約500人近い人数をうまくまとめたレクリエーションのリーダーのやり方等は学ぶところがあった。

友達、ペン・フレンドも増えた。これからの日本の農業……いや世界の農業のために立ち上って行く者ばかり、みんないっしょけんめいなんだ……オレもがんばらなくては



農林省・北海道中央島根県農業事務所入口

『“全国農村青少年技術
交換大会”に参加して』

アルゼンチン国・ブエノス・アイレス州・ウルキッサ移住地
西 田 孝

7月5日、横浜・海外移住センターに集合し、
研修生一同元気そうであった。

7月6日に農村青少年技術交換大会・会場に向
けて出発し、同日1時より開会式が行なわれ全国
いたるところから集まりいろいろな言葉が入り乱
れ、少しややこしくなってきたのもうそでない。

初対面でありながら、みんなうまくうちとけあ
っているようだった。次の日から各ブロックに分
かれ発表が行なわれた。みんなそれぞれ真剣に考
え、自分が研究した事、又これから自分がしよ
うとしている事などを発表していき着々と進められ
ていった。

1日目の発表が終り夜のレクリエーションは、す
っかり友達になり昼間の疲れも見せず1日目を楽
しく終わらせた。部屋に帰っても話はつもり、消
燈の時間になっても全々気にせず話し続けていた。

3日目は地方訪問で千葉県農家の農家を訪づ
れ色々な状況を聞いて帰った。この合同研修は3
泊4日であったが、うそのよう時間が過ぎ「あっ
」と云う間に別れる時がきた。この長いようで短い
時間の中で、色々な面・色々な事を感じさせられ、
見習うべきだと思う事も沢山あった。

僕が日本に来てありとあらゆる会合に出席し感
じ学んだ事は、僕等の移住地の青年会もこういっ
た会合をふやし、色々な所の状況や情報を知り良
い所を取り上げ研究し、自分の意見を組合わせ事
業を進めるべきだと思う。

今回の参加者は指導者を除いて、みんな20歳
前後であるのに良くやっている。

僕等も日本の若者に負けないよう頑張らなくて
はと、つくづく感じた。本当にこの合同研修に参
加できた事をうれしく思っています。

「第16回全国農村青少年 技術交換大会に参加して」

私達第五期移住者子弟技術研修生は昭和51年7月6日～9日まで、東京都渋谷のオリンピック記念青少年総合センターで開催された第16回全国農村青少年技術交換大会に参加させて頂きました。

このすばらしい若人の集まりに参加できたことは私の日本における研修期間の内でも、最とも意義の深いものであります。

日本全国から約500名もの農業青年が集まったわけですが、さすがに各県の代表として選ばれてきた若人達だけあって優秀青年ばかりでありました。

私は日本に来て初めて農業を真剣になって取り組んでいる青年達と出会い話しを交すことができました。

日本では、自分が想像していたよりもはるかに農業後継者の問題が深刻である事を知り、こんなことで将来の日本農業は大丈夫なのかと内心では心配しておりましたが、今度、このようなすばらしい青年達が、現在の日本に大勢存在していることが解り、自分の思い過ごしであったことが充分にわかりました。

大会2日目のプロジェクト発表は、都道府県の名代表者1名が六会場に分れて行なわれ、私は第一会場で7名のプロジェクト発表を聞くことができました。そして感じましたことはプロジェクト発表された各県の代表者は、さすがだと思いましたけれど、それ以上に、発表を聞いていた若者達の活発な質問する態度が、とてもハキハキしていて、聞いていて気持ちの良いものがあった。

彼ら達全員が、所在地で自主的な集団活動に参加し、「プロジェクトチーム」を作り、農業に対する活発な研究討議がなされている者ばかりで1人1人が「自分がやらねばならぬ」という自覚と責任を感じながら一生懸命がんばっている様子がよくうかがえましたし、又、何事についても失敗を恐れず、多くの経験をえて農業に取り組み、情熱の灯を燃焼しようとしている日本の若者達、彼らの純真な姿と心意気がよくあらわれており頭の

ブラジル国・パラナ州日光移住地

有 田 和 人

下るおもいがしました。

日本におきまして、とかく若者の間には農業は地味で一般に低くみられがちであるが、もっと農業という職業に誇りを持つべきである。私は農業こそ考えよう、やり方しだいでは、何よりも一番魅力があり、最とも羨望されている良い職業だと思つづく思います。特に私の住むブラジルのような広大な国での農業は、夢と希望が無限に有り最高に生きがいのある仕事であることを新たに確信する事ができました。

夜のレクリエーションでは、体育館に全員集合して、歌、踊りなど、ほんとうに楽しくうたいおどって共同生活、集団生活を通して人間的な交流と同志的な結合を深めることができた。

私は根っから農業が好きで、一生を土と共に生きて行こうと決心しているのでありますが、農業が大好きだという最大の根拠は自由だということです。

土は万能の力を持っています。自分で考え、自分で種をまく、そして全身に汗を流し、その報酬が収穫である。決して農業という仕事を卑下する必要はなく、胸を張って誇っているのです。暖かな陽光を浴びて、好きな流行歌を声高うたい、緑一ぱいに包まれ、美味しい空気を胸にすいながら働く様は時の大臣や社長でも真似のできない自由、自然の姿です。朝早くから作業を始めようが定刻8時より遅く仕事にかかろうが、誰一人とがめる人もいない。雨が降れば自由に休むことも可能だし、一家が、やわらかな草の上に座し、お茶を囲んで和気あいあいと語る姿もまた微笑ましく幸福です。普通の勤め人なら一家団らんは、夜と休日しかないが、農家の場合は、一日中、一年中なのです。

私は今度の大会に参加して、日本の優秀な農業青年達と話しを交す機会に恵まれて農業のすばらしさを再確認すると同時に、このような人達が、日本の農業の柱となって頑張っているのなら、日本の農業は当分の間は大丈夫だと思いました。又

この大会で強く感じましたことは、第一に協調精神であり、仲間、友人関係を大切にする精神であった。第2には、楽しい農業、魅力のある農業経営でなければならないということです。

魅力ある農業とは、決して生産力や所得を上げることだけではないのです。

私の魅力ある農業とは、自分の好きな道で、自分の望む方面で、自己の能力を、技術を自由に伸ばし人の為、国の為になれば最高だと思います。

「汗なき人生は暗黒なり」農業は汗が付きものです。顔に汗して手にする真珠のような果実、一口食べて、口の中でとろけるような美味しいブドウの実を味わう時、冬の一定作業も夏の暑い日ざしの中での袋かけも、雨の中で全身びしょぬれになっての収穫も頭の中には残らないもので、収穫の喜びは、我々農業者だけしか味わえないものです。

私の日本における研修生活も残りわずか2ヶ月余りとなりましたが、日本で学び得た農業精神をしっかりと胸にきざみ、ブラジルに帰国後、移住地の人達に伝えていくのが私に与えられた使命なのであります。

子弟研修生一覽表

子弟研修生一覽表

第1回生（昭和46年度）子弟研修生一覽表

第2回生（昭和47年度）

〃

第3回生（昭和48年度）

〃

第4回生（昭和49年度）

〃

第5回生（昭和50年度）

〃

第1回（昭和46年度）

国名	（推せん支部）	氏 名	生年月日 年 令	学 歴 （日本） 現地	本籍地または 父 親 出 身 地
ド ミ ニ カ	（サントドミンゴ） コ ン ス タ ン サ	村 田 千 秋	昭和 23. 3. 14 23 才	（小 3 中 退） 中 卒	鹿児島県川内市
プ ラ ジ ル	（ベ レ ン） 第 2 ト メ ア ス	武 藤 義 博	17. 4. 7 29 才	（小 卒） 中 卒	福島県会津若松市
	（レジーフェ） ク ビ チ ャ ッ ク	岡 本 耕 次	25. 6. 14 21 才	（小 4 中 退） 高 卒	愛媛県 東宇和郡城内町
	（リオデジャネイロ） フ ン シ ャ ー ル	池 田 秀 広	27. 7. 5 19 才	（なし）2 世 中 卒	広島県深安郡市村
	（サンパウロ） グ ェ タ パ ラ	脇 山 昭 治	25. 10. 28 20 才	（小 6 中 退） 工業学校 SENAI (職業訓練コース) 卒	佐賀県唐津市
	（サンパウロ） ビ ニ ャ ー ル	山 田 豊	23. 10. 6 22 才	（中 卒） 小 2 修了	福井県武生市
ボ リ ビ ア	（サンタクルス） サ ン フ ェ ン	仁田原 豊	23. 9. 4 23 才	（小 3 中 退） 高 1 中 退	福岡県八女郡黒木町
パ ラ グ ア イ	（アスンシオン） エンカルナシオン	安 田 孝	12. 4. 3 34 才	（大 2 中 退） な し	秋田県仙北郡協和村
ア ル ゼ ン チ ン	（ブエノスアイレス） ブエノスアイレス州 ケルテル・ケル ト・モレノ	榎 本 一 穂	27. 3. 26 19 才	（なし）2 才 渡航時 中 卒	和歌山県田辺市

移住者子弟技術研修生一覧表

研 修 機 関	研 修 内 容
鹿児島県 農村センター 高等部園芸科	そ栽培，午前中講義受講，午後除草，消毒，出荷等実習。研修旅行（ヤンマー長浜研修所で3日間農業用エンジン分解・組立実習，長野県営伝中央農場，京都タキイ種苗見学）。
福島県立 農業短期大学 協同組合科	農業経済，農業簿記，農協原論，農協経営論，農業法規，農業機械等講義受講。研修旅行（静岡県三ヶ日農協他2ヶ所）。県内湯野農協等で実習。
愛媛県 果樹試験場南予分 場	講義～落葉果樹，病虫害防除，土壌肥料，柑橘栽培等。 実習～夏柑採果，除草，薬剤散布，落果調査等。 落葉果樹研修。
広島県立 西条農業高等学校 広島県 食品工業試験場	果物の成分検査，イチゴジャム，ママレードの加工実習，トラクター運転実習，工場見学（三島食品）7/26～8/3 県食品工業試験場で研修（農産物加工製造技術および同分析法の課程終了）
佐賀県 養鶏試験場	養鶏経営（衛生，繁殖，育種等）を中心とした講義受講。解体，飼料配合等の実習。全販連佐賀種鶏場における雛卵舎，育雛舎，病理解体等の場外実習。
福井県 農業後継者センター 本科畜産専攻	乳牛飼育について午前中講義，午後実習。5/24から1ヶ月間農家実習（乳牛）7/19～24 第2回全国農村青少年研修交換大会（於 ハケ岳）に参加。
福岡県 種 鶏 場	衛生面を主体に育雛管理，防疫，解剖等の実習。飼料，設備，交配等専門的分野の講義受講。9月より2ヶ月間民間養鶏場で実習（飼育管理の実際，販売流通システム等）。
秋田県立 金足農業高等学校 農協専攻科	農協法，農業経済，簿記等講義受講。7/23～29 県経済連で各支部実習。金浦農協等県内農協で実習。8/10～13 埼玉県川口市内で農業研修
和歌山県 農業大学校 園芸科花卉部門	農業経営，果樹，作物，畜産，農業機械等講義受講。 サルビア，マリーゴールド，ペゴニア等の育苗，定植その他の花卉実習。

第 2 回 (昭和 4 7 年度)

国名	地 区	氏 名	生 年 月 日 (年 令)	渡 航 年 月 日	学 歴 (日 本) 現 地	本籍地または 父 親 出 身 地
ブラジル	リオ・デ・ジャネイロ市 バプカイヤ地区	横 山 覚	S. 29. 5. 16 (18)	2. 世	(一) 中 卒	(父) 福 島
	サン・パウロ 州 ジャカレイ 移住地	山 上 としこ	26. 1. 26 (21)	S. 40. 8	(中 3 中 退) 中 1 中 退	愛 媛
	サン・パウロ 州 桜 植 民 地	佐 藤 良 洋	25. 5. 26 (22)	38. 1	(中 1 中 退) (一)	北 海 道
	アマゾンナス 州 マナウス 市	石 沢 力 雄	22. 8. 9 (25)	29. 4	(一) 商 高 卒	山 形
	ベルナンブーゴ 州 リオ・ポニート入植地	森 村 正 隆	17. 10. 11 (29)	31. 7	(中 2 中 退)	群 馬
	サンタ・カリーナ 州 ラーモス 移住地	日 浦 秀 雄	20. 10. 19 (26)	37. 10	(中 一 退)	北 海 道
パラグアイ	イ タ プ ア 県 フ ラ ム 移 住 地	久 岡 寛	16. 6. 19 (31)	33. 7	(高 一 修 了) 小 4 修 了	高 知
ボビリア	サンタ・クルース 県 オキナワ オキナワ第 3 移住地	久 高 将 行	24. 8. 3 (24)	36.	(小 6 中 退) 高 卒	沖 縄
ドミニカ	ベ ラ ビ ア 県 バ ニ ー 地 区	藤 川 求	22. 12. 13 (23)	32. 10	(小 4 中 退) 高 2 在 中	愛 媛

移住者子弟技術研修生一覧表

研 修 機 関	主 な 研 修 内 容
福島県立 小高農業高等学校	そ菜・園芸・農学一般
堺市養鶏農業協同組合	畜産（ブロイラ養鶏）
神奈川県立 農業大学校別科	花卉・果樹
座王ハム有限会社	畜産加工（ハム・ソーセージ）
群馬県畜産試験場	そ菜・畜産
長野県園芸試験場	果樹（リンゴ）
群馬県立 農業大学校蚕業学校	養 蚕
三井物産(株)大阪支店 原綿糸織物部綿花課	① 綿花事情 ② 綿花格付士資格取得 （アメリカ）
雇用促進事業団 愛媛総合高等職業訓練校	農業機械修理

第 3 回 移住者子弟

国 名	地 区 名	氏 名	年 令	性 別	渡 航 月 日	渡航時 年 令
ブラジル国	ノボ・フリブルゴ	野 口 忠 義	24	男	昭和32年 3月	8才
同 上	ガ タ パ ラ	設 染 新 作	23	男	〃 38年 7月	13〃
同 上	日 光	佐々木 哲 朗	23	男	〃 34年 2月	8〃
同 上	ノボ・ムンド	大 塚 寛	22	男	〃 32年 8月	6〃
同 上	第2トメアスー	西 田 清	21	男	〃 41年 2月	14〃
同 上	サンタレン	千 葉 京 子	23	女	〃 29年 12月	5〃
同 上	クビチエツク	東 春 好	20	男	〃 35年 3月	7〃
同 上	イ ボ チ	三 輪 新太郎	22	男	〃 29年 11月	3〃
パラグアイ国	アルト・パラナ	永 井 儀 昭	28	男	〃 36年 4月	16〃
同 上	イ グ ア ス	渡 辺 準 一	20	男	〃 42年 6月	14〃
同 上	アマンバイ	岡 本 儀 彦	25	男	〃 33年 8月	10〃
アルゼンチン国	カルアベー	小 野 達 朗	24	男	〃 36年 4月	12〃
ボリビア国	オキナワ第1	根 間 玄 真	25	男	〃 29年 7月	6〃
同 上	サンフアン	長 谷 研 詞	22	男	〃 30年 5月	4〃
ドミニカ国	ビセンテ・ノーブレ	鈴 木 雅	23	男	〃 33年 5月	9〃

技術研修生一覽表

本籍地	研修科目	研 修 先
北海道	花 卉	神奈川県立農業大学校 (48. 4 ~ 49. 3) (篤農家) 大沢春吉 (49. 4 ~ 49. 9)
茨 城	養 蚕	群馬県養蚕試験場 (48. 4 ~ 49. 9)
愛 媛	養 蚕	同 上
徳 島	農 協 貿 易	徳島県農協中堅職員養成所 (48. 4 ~ 48. 7) 徳島県石井町農業協同組合 (48. 8. ~ 48.11) 大洋漁業(株) 貿易第2部 (48.12 ~ 49. 9)
宮 崎	農業機械	農林省農業技術研修館 (48. 4 ~ 49. 3) 茨城イセキ販売(株)ほか (49. 4 ~ 49. 9)
宮 城	農産加工	宮城県立上沼農校実習部 (48. 4 ~ 48.11) 清水市農業協同組合 (48.12 ~ 49. 3)
長 崎	花 卉	長崎県総合農林センター (48. 4 ~ 48. 9) 長崎県大村果樹試験場 (48.10 ~ 49. 9)
静 岡	果 樹	山梨県果樹試験場 (48. 4 ~ 49. 3) (篤農家) 内田金之助 (49. 4 ~ 49. 9)
愛 媛	畜 産	農林省十勝種畜牧場 (48. 4 ~ 48.11) 群馬県畜産試験場 (48.12 ~ 49. 9)
福 岡	畜 産	農林省十勝種畜牧場 (48. 4 ~ 48.11) 埼玉種畜牧場 (48.12 ~ 49. 9)
兵 庫	農 協	兵庫専修農業訓練校 (48. 4 ~ 49. 3) 兵庫県姫路農業協同組合 (49. 4 ~ 49. 9)
宮 崎	果 樹	宮崎県立農業大学 (48. 4 ~ 48.10) 長崎県大村果樹試験場 (48.11 ~ 49. 3) 農林省園芸試験場, 興津支場 (49. 4 ~ 49. 9)
沖 縄	農 協 貿 易	宮崎県立農協講習所 (48. 4 ~ 49. 3) 兼 松 江 商 (株) (49. 4 ~ 49. 9)
長 崎	農業機械	農林省農業技術研修館 (48. 4 ~ 49. 3) イセキ, カワサキサービス販売(株) (49. 4 ~ 49. 9)
愛 知	果 樹	愛知県農業総合試験場 (48. 4 ~ 49. 9)

第4回移住者子弟

国名	地区名	氏名	生年月日(年齢)	性別	渡航月日
ブラジル国	イタグアイ	岡崎ソニアマリア	S. 22.10. 7(28才)	女	2世
同 上	グアタバラ	渡辺 一 寛	S. 23. 4.23(27才)	男	S. 39. 4
同 上	日光	中 村 弘	S. 21. 6.10(29才)	男	S. 32. 6
同 上	ビニャール	深 沢 裕 夫	S. 25. 3. 7(23才)	男	S. 39.
同 上	バルゼア・アレグレ	西 山 立 美	S. 28. 8.14(22才)	男	S. 34. 5
同 上	モンテ・アレグレ	高 谷 和 夫	S. 22. 9.23(28才)	男	S. 30.
同 上	マナウス	出 田 洋 次	S. 24. 5. 5(26才)	男	S. 37. 1
同 上	アマカラ	細 越 卓 美	S. 27. 6. 8(23才)	男	S. 31.
同 上	クビチュク	竹 並 明 弘	S. 28. 1. 4(23才)	男	S. 28. 7
同 上	クビチュク	神 田 晃	S. 30. 6.27(20才)	男	S. 35. 2
同 上	イタチ	宮 崎 信 輔	S. 21. 1. 1(30才)	男	S. 35. 6
パラグアイ国	ソラム	渡 辺 保 夫	S. 25. 7. 1(25才)	男	S. 34. 4
同 上	アマンバイ	原 本 功	S. 22. 7.31(28才)	男	S. 33. 3
同 上	アスンシオン	堤 田 元 克	S. 26. 2. 6(25才)	男	S. 30.
アルゼンチン国	ブエノス	米 慎 也	S. 27. 9.13(23才)	男	S. 33. 9
同 上	ガルアペー	植 松 吉 巻	S. 24. 5.14(26才)	男	S. 34. 8
ボリビア国	オキナワ	平 良 賢 次	S. 21. 6. 7(29才)	男	S. 32.10
同 上	オキナワ	幸 地 哲 雄	S. 26. 1.21(23才)	男	S. 29.
同 上	サンフアン	藤 井 恒 正	S. 22. 9. 8(28才)	男	S. 38. 6
ドミニカ国	ハラバコア	福 永 正 彦	S. 22. 7.30(28才)	男	S. 32.

技術研修生一覽表

本籍地	研修科目	研 修 機 関
高 知	花 卉	(株)赤塚植物園 (49.4 ~ 50.3) 東山園芸株式会社 (50.4 ~ 50.9)
山 形	養 鶏 柑 橘	茨城県養鶏試験場 (49.4 ~ 50.3) 農林省果樹試験場興津支場 (50.4 ~ 50.9)
三 重	養 蚕	群馬県蚕業試験場 (49.4 ~ 50.9)
静 岡	果 樹	山梨県果樹試験場 (49.4 ~ 50.3) 長野県園芸試験場 (50.4 ~ 50.9)
山 口	農産加工	山口県経済農業協同組合連合会山口加工場 (49.4 ~ 50.3) 福岡県園芸試験場豊前分場 (50.4 ~ 50.9)
長 崎	牧 畜	福岡県種畜場 (49.4 ~ 50.3) 熊本県畜産開発公社西原公共育成牧場 (50.4 ~ 50.5) 群馬県浅間家畜育成牧場 (50.6 ~ 50.7) 農林省十勝種畜牧場 (50.8 ~ 50.9)
熊 本	自 動 車 整 備	熊本県専修職業訓練校 (49.4 ~ 50.3) ホンダS F九州熊本南工場 (50.4 ~ 50.9)
山 形	自 動 車 整 備	東京都江戸川高等職業訓練校 (49.4 ~ 50.3) 東京トヨタジゼル株式会社 (50.4 ~ 50.9)
福 岡	柑 橘 農業機械	福岡県園芸試験場 (49.4 ~ 50.3) 田中農業機械工場 (50.4 ~ 50.9)
長 崎	柑 橘	福岡県園芸試験場 (49.4 ~ 50.3) 長崎県果樹試験場 (50.4 ~ 50.9)
熊 本	果 樹 柑 橘	熊本県果樹試験場 (49.4 ~ 50.9)
広 島	農 協	広島県農業協同組合研修センター (49.4 ~ 50.3) 小河原農業協同組合 (50.4 ~ 50.9)
高 知	農 協	高知県大分農業協同組合 (49.4 ~ 50.9)
熊 本	果 樹	山梨県果樹試験場 (49.4 ~ 50.3) 農 家 河野博敏 (50.3 ~ 50.9)
山 形	果 樹	山梨県果樹試験場 (49.4 ~ 50.3) 農 家 今井親純 (50.4 ~ 50.9)
長 野	果 樹	農林省果樹試験場興津支場 (49.4 ~ 50.9)
沖 縄	農 協	福岡県農業協同組合講習所 (49.4 ~ 50.3) 伊江村農業協同組合 (50.4 ~ 50.9)
沖 縄	農 協 綿 花	福岡県農業協同組合講習所 (49.4 ~ 50.3) 兼松江商株式会社大阪支社 (50.4 ~ 50.9)
熊 本	農 協	福岡県農業協同組合講習所 (49.4 ~ 50.3) 福岡県農協中央会 (50.4 ~ 50.9)
鹿児島	農業機械	佐賀県農業研修学園 (49.4 ~ 50.9)

第 5 回 移住者子弟

国名	地区名	氏 名	年 令	本 籍 地	研 修 科 目
ブラジル	ブラジリア	大 城 竹 幸	25	沖 縄	観 葉 鉢 物
	日 光	有 田 和 人	29	愛 知	果 樹 園 芸
	ビニャール	広 瀬 昭 憲	23	福 井	農 業 機 械
	ムンドノーボ	田 中 愛	20	秋 田	生 活 改 善
	グァタバラ	小 林 武 久	21	長 野	農 業 機 械
	日 光	中 村 清	26	三 重	養 鶏
	第2トメアスー	平 水 繁	28	宮 城	養 豚
	第2トメアスー	遠 藤 憲 一	28	福 島	畜 産
	トレゼテンプロ	須 藤 毅	23	・	自 動 車 整 備
	サルバドール	吉 井 丈 治	20	千 葉	畜 産
パラグアイ	イグアス	関 節 朗	21	群 馬	養 蚕
	アルト・パラナ	工 藤 則 吉	25	岩 手	旋盤・電気溶接
	アマンバイ	下 元 敬	23	高 知	畜 産
アルゼンチン	ガルアペー	水 野 悦 郎	25	長 野	柑 橘
	ウルキッサ	西 田 孝	20	長 崎	花 卉 園 芸
ポリビア	サンファン	牧 尾 孝 司	21	長 崎	畜 産
	オキナワ	宮 城 邦 夫	23	沖 縄	・
	オキナワ	池 原 正 英	23	・	・

技術研修生一覧表

研 修 機 関
第一園芸 K K 富士園芸研修学校
山梨県果樹試験場 内田金之助方
福井県農業試験場 農林省・農業技術研修館
秋田県農業短期大学
長野県畜産試験場 農林省・農業技術研修館
三重県農業経営大学校 (株)三重研醸社第二工場
熊本県草地畜産高等研修所 比留川直幸養豚農場
福島県畜産試験場
仙台高等職業訓練校 (株)五十嵐商会
群馬県畜産試験場
長野県園芸試験場
群馬県蚕業試験場
盛岡専修職業訓練校 有限会社 鈴木機械製作所
群馬県畜産試験場
静岡県柑橘果樹試験場
長崎県総合農林試験場
長崎県畜産試験場 藤井裕一方
長崎県畜産試験場 藤井裕一方
沖縄県畜産試験場 長崎県畜産試験場

編 集 後 記

“ゆうかり”はブラジルにおける植林の中で、面積、量ともに一番多く、その成育・伸長ぶりは他の追従を許さないと言われています。一度植林した株から3～4回伐採でき、その都度切り株から新芽が多数でて、これを2本または3本立に育成し、7～8年毎に伐採ができるという性質を持っているそうですが、研修生諸兄が、自国へ帰り、その発展を担う若者としてゆうかりの如く、真直に根深く成長されることを願ひまして、本誌の表題として“ゆうかり”が採用されています。

このたび、ようやく第5回生の“ゆうかり”を作成致しました。

帰国後のお互いの交流材料として活用して下さい。

最後に修了した研修生の皆さんノ 帰国後それぞれの地域で活躍中と思いますが、毎回発行することの“ゆうかり”作成にあたり、各研修生の皆さんからのご報告・便り等を待っております。

移住第2業務部

農業移住課

LIB